特107
688

北陸温泉めぐり

中谷治宇二郎

近代文明社刊

始

特107
688

北陸温泉

りしめ

大正
12. 7. 25
内交

目次

□溫泉めぐり……(一)
蘆原の湯まで・東尋坊奇勝
吉崎の御坊へ・湯の匂ひ
夢の國幻の華・勅使の横穴
名刹那谷寺・温泉情緒
湖の出湯へ・篠原懐古
和倉の湯まで・海を前にして

□溫泉と俚謠……(三八)
三國ぶし
山中ぶし
大原ぶし

□溫泉ところどころ……(四三)
交通・風光・沿革・現狀・泉質と効能・名所と傳說
一、蘆原温泉
二、山中温泉
三、山代温泉
四、粟津温泉
五、片山津温泉
六、和倉温泉

温泉めぐり

蘆原の湯まで

「一寸と北陸の溫泉まで」と、日々の忙務を逃れて昨夜東京驛を發つた自分の身體は、一夜をむし暑い列車中におくつて、北陸線に入ると、敦賀杉津、武生鯖江福井と過ぎて、午後には金津の小驛に着いたのであつた。

蘆原溫泉行乘替へ……

三國線はガラリと空いて、百姓の爺さんが一人、煙草をくわえて坐つてゐる。

「爺さん蘆原までは未だ大分かゝるかね」

「うんにや。ほんの少時じやがね」

汽車は走つたかと思ふと直に止つた。湯浴みの客にまざつて蘆原停車場前の廣場を歩いて行く

温泉めぐり

左右の家々には細い格子がはまつて、懸あんどんのある狀なぞ、何だか京の街々をでも歩いてゐる樣な氣がするのであつた。關西の匂。それは北陸温泉の到る所で感じた事ではあつたけれども、この温泉では特に强く感ぜられた。

湯の側を鍵の手に折れると、大きな旅館が軒を並べてゐる。すべてが明るい感じだ。

宿について旅に汚れた服を、寛いだてらにかへると、急に温泉らしい氣分になつた。泉水を築いた廣い庭には春の日が一ぱいに射して、鯉がしきりにはねる。浴槽へ出掛けて行くと、ここも春の日差の洪水である。あふれる湯に首までつけて、うんと手足を伸ばしてゐると、さば〳〵した樣な温泉が全身にしみ込んで、思はず長恨歌の一節を思ひ浮べた。

温泉水滑洗凝脂。侍兒扶起嬌無力。……

ぐつたりとした身體を居室に運んで來ると、日はもうかぎつて、平野のあちこちに靄が流れ初めてゐる。築山の向ふの亭にも灯がついた。

「姉さん、もう御飯かね」

チリン〳〵と長い廊下を食器の音をさせながら傳はつて來た女をふり返つて見ると、膳の上には鯛に雲丹。

東尋坊奇勝

「えゝそりやここは海が近けさかい、魚は新しわね。あんさん、明日は三國へおいでけ、えゝ所やわに」

越前訛が特に可笑しく耳に附くのに、つい色々と話がはづんで、三國名物の話を聞く。女郎と雲丹と櫻と東尋坊。この時、日の暮れ果てた田舍道を、三國ぶしを歌つてやつて來る、若者の聲が傳はつてゐるのであつた。

「三國い、みくうにいとを、通よやつあ、馬あ鹿あゝよ。
帶の、幅あほをど、あるう道を。
あるみちいを、えゝある道いをう。
をびのを、はあばほをど、あるう道を。ちよいゝ、ちよいとさつさあ」

その哀調に守られて、靜に温泉の第一夜をすごす。

温泉めぐり

日の高い頃蘆原を汽車で、三國の驛に向つた。舊くからの港町は、おつとりとした一帶のさびを見せて、屋根の低い漁師の家にも、奈良朝時代のものゝ匂が殘つてゐる樣な氣分がする。人も知る如く三國の宮の名は、繼體天皇王位繼承問題の時、すでにものゝ本に見えてゐるのである。

九頭龍川の岸にそつて、西の方へ出はづれて行くと、やがて河口の港場へ出た。遠い對岸の松は霞にうすれて、防波堤には浪しぶきが立つてゐる。其間に船泊してゐるのは古い和船である。

港の外側には海水浴場があつて、閉ざされた茶屋は、夏時の盛を物語る。このあたりから次第に岸が高まり出して、やがて、白浪が低く巖を嚙む樣になつて行くのである。

途は相不變平坦だ、丘の上には青草が生えて、牧場の長閑さを思はせる。

昔、大里郡平泉寺と云ふ所に、東心坊と云ふ奇體の惡僧があつたそうだ。土地の人々は一方ならず惱まされたあげく、とう〳〵謀をもつて海へ舟遊にさそひ出し、千仞の絕壁の下で舟の底のみを拔いて沈め殺したと云ふ。この傳說のつたはつた地が卽ち今の東尋坊で、次第に高くなつた斷涯が、極度の高さに達して作つた自然の大岩柱の崖濱である。直下四十尺から五十尺まで、幅は二丁四方一つの岩石であると云ふ。

火山岩であるこれ等の岩は、正しい方形標柱狀を成して、その一つの柱が一間四方程もある。

見事な自然の建築。この自然の建築に對して、日本海の怒濤が遠慮會釋もなくぶつつかつては撥ね返され、洞窟に躍り込んでは物凄い響を立てゝゐる。舟を借りて岩壁の下から上を望むと、天にもとゞく程上が遠く見えるそうだが、實際あの碧い海の色と堅丈な岩の色を比べて見た時、そんな氣も起るだろう。自分は舟に弱いのでその快を得る事が出來なかつた。

東尋坊奇勝

ここの岩の上の眺望もすこぶる大きなものである。左方白い冠の樣な雄島を越えて、碧い眉のような能登半島の山々が見えてゐるし、右は、三國港から安島崎までが、呼べば答へるように對してゐる。

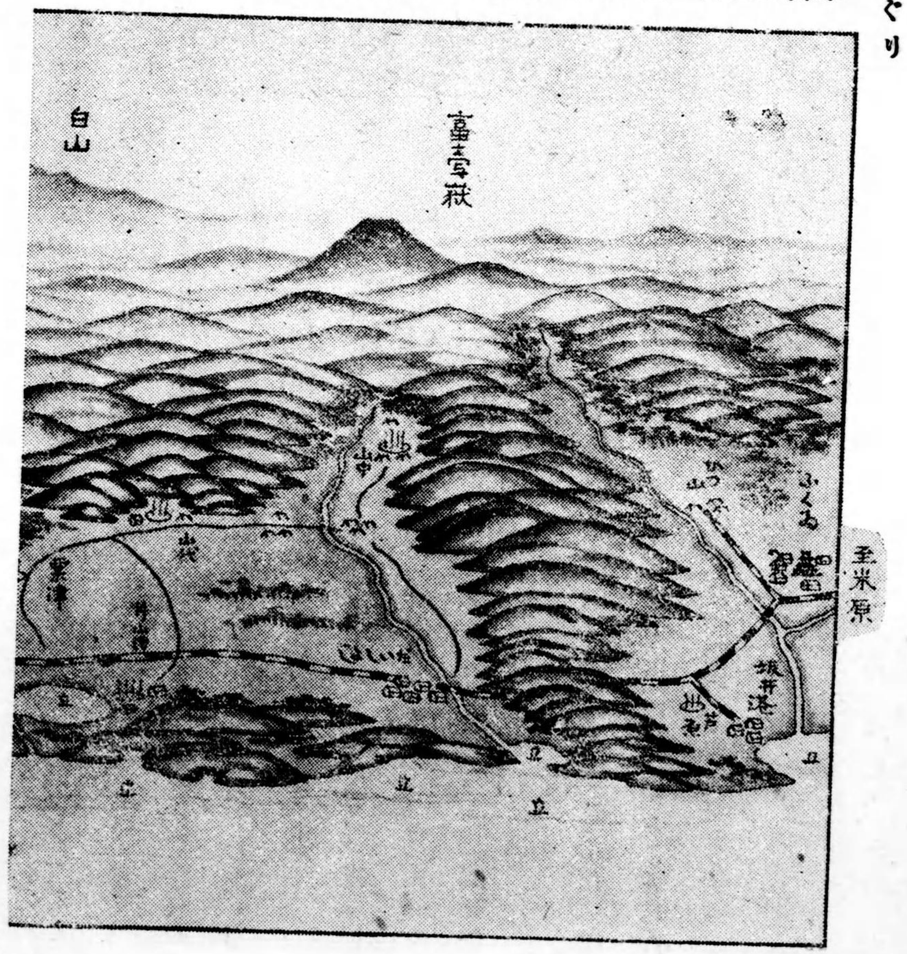
方々岩の上を步き廻つて、背後の丘に來て寢ころんだ。赤松の幹をバックにして、こうして牛の樣に草に寢ることなんか、都ではとうてい想ひだにしなつた所である。

日が暮れそうになつてから、ようやく蘆原の宿に歸りついた。

見物・山代泊（第三日） 勅使・那谷寺見物・粟津泊（第四日） 實日） 第七日歸京

山代・那谷寺見物・粟津泊（第三日） 片山津ヲ經テ金澤泊（第

テ片山津泊（第三日） 金澤ヲ經テ和倉泊（第四日） 第五日歸京

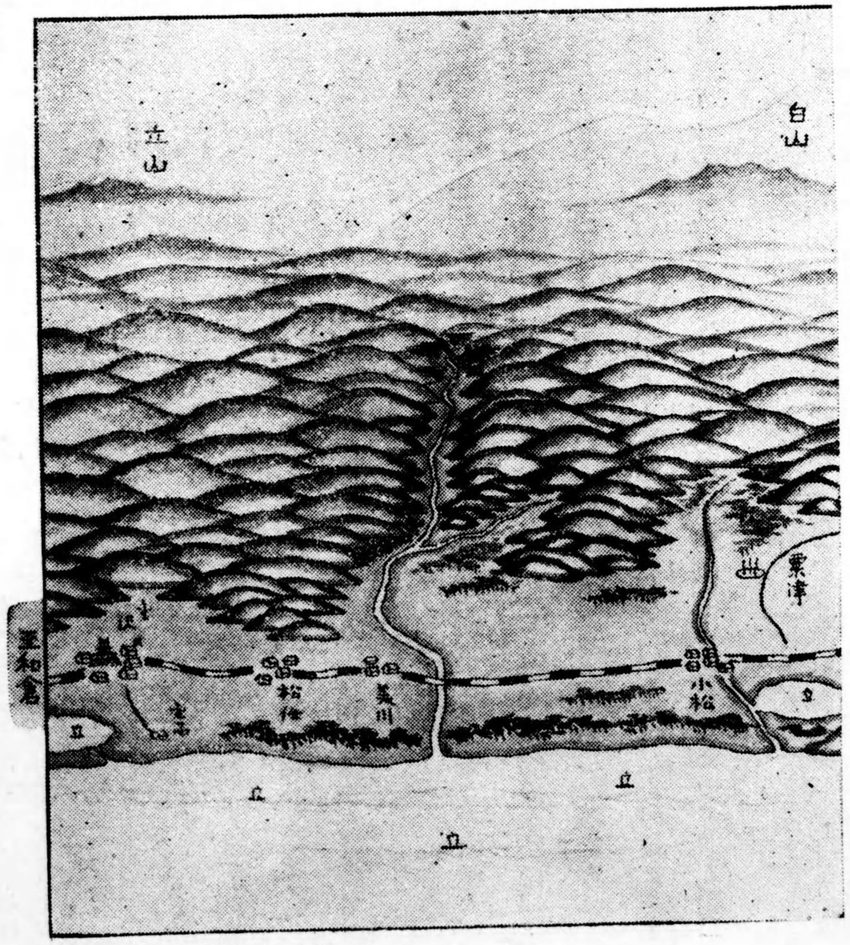


旅行日程

〔第一案〕 ——東京驛夜行・京都早朝出發——
蘆原泊（第一日） 東尋坊見物・山中泊（第二日） 蟋蟀橋
盛塚見物・片山津泊（第五日） 金澤見物・和倉泊（第六

〔第二案〕
蘆原泊（第一日） 東尋坊・蟋蟀橋見物・山中泊（第二日）
四日） 和倉見物直ニ歸京（第五日）

〔第三案〕
蘆原泊（第一日） 山中ヲ經テ山代泊（第二日） 粟津ヲ經



吉崎御坊へ

昨夜汽車で直に山中に行く日程であつた自分も、柔らかな蘆原の湯と、特に面白いと思はれる旅程を宿の主人から耳にした爲に、二日目の夜をもこの溫泉場で過して、今朝早くから徒歩で吉崎大聖寺を經て、山中に達する路を探ることにした。

蘆原から北一里計し、何の奇もない畑中の道を歩んで北潟のある北潟村に達すると、四圍の風景が突然に變つて、恐ろしく木の茂つた山が左に聳え、右は一面の蘆わらで、一筋の水路が、遠く山の彼方にかくれてゐる所に出た。北潟！　名は湖であるけれども、砂丘に河水が隔てられて出來上つたこの潟は、帶の様に延びてゐて、これを越してゆくと大聖寺川の下流、吉崎村に達するのである。村童に交渉して舟を仕立ててもらつてそれに乘込んだ、舟は親父とその子供とが二人して漕ぐのである。

舟が滑に湖上を傳はり初めると、左右の景は刻々に移り、水上におほひかぶさつた老樹の緣

吉崎御坊花木

が、物凄いまでにせまつて來る。水はいよいよ蒼く淀んで、行手は果なく開けてゆく。幅は、時には三五町にも擴り、時には手のとゞきそうに狹まつて來る。四邊閑寂、水鳥の水棹の音に驚いて飛立つのみで、さながらに太古に似た靜けさがある。

ふと、木々にかくれた湖の彼方から、物思にふける自分の耳に得ならぬ哀音が響いて來る。原人が悲痛の情を歌に寄せたような、世の常の言葉ではない。近よつて行くと、それは漁師が十四五人、舳の上つた海の船で、漁して歸つて來るのであつた。二時間半計しで吉崎村に達する。

ぼんやりした様な氣持で陸の人になつて、今自分を乘せて來た船の、村へ歸る方を振反つて見つめてゐた。船の中からは又さつきの歌の聲が起る、親と子と、何の憚もなくこうしてうたひつゝ元きたみちを歸

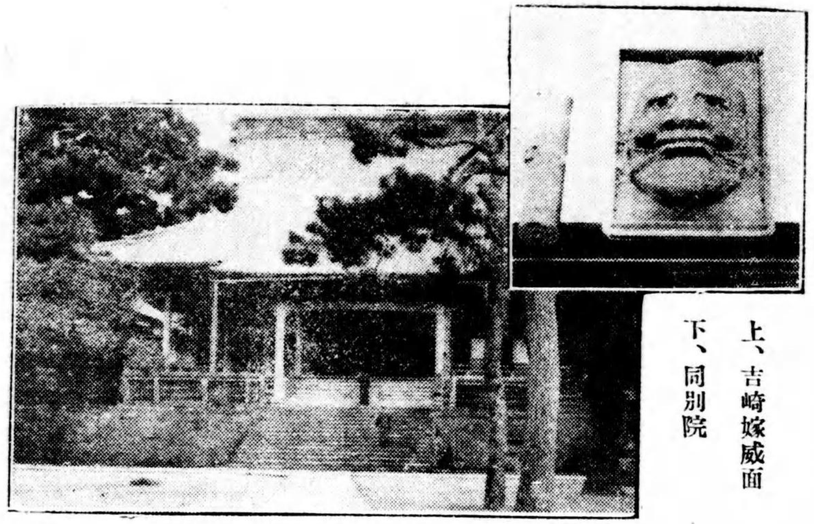
つて行くのである。自分は何か二千年以前の世から、こうして現世の岸に立たされた時の様な氣がした。

北潟の水が大聖寺川と合して、海に注ぎ込もうとする合流點に、鬱蒼と老樹の茂つた孤島がある。鹿島と呼んで、この地方でも名所の一つに數へられてゐると云ふので、河岸から田の中へ出て四五丁陸つゞきで行つて見る、四五百町歩の塚の様な形の島一杯に、足の踏み込み様もない程の木の根である。梢は天を蔽うて、天日暗しと云つても誇稱ではない。ひんやりとその間から秋の末の様な空氣が胸にせまつて來て何とも云へぬいゝ氣持である。北潟と云ひこの鹿島と云ひ、こうした人境を脱した様な場所に入ると、いつか自分も物語中の人物となつて、神の出現と云ふようなことを頭に浮べるのであるが、特に北陸と云ふ何か暗示的なムードがその連想を助けて呉れる。

吉崎村の寺院前に引返して、茶屋で晝飯を濟ませて、傳説の寺境へ入つて行つた。

吉崎御坊、それはこんな海岸の片田舍ではあるが、吾々のような宗教に關係のない人間でも、或る感じを受けないでは居れぬ様な、信仰の歴史を持つた土地である。

一代の傑僧蓮如が、永い流浪の旅から北陸路に入り込んだのは文明三年四月のことであつた



上、吉崎嫁威面
下、同別院

が、その高德を慕ふ信者が忽に雲集して、同年七月には越前領吉崎村に道場が建つた。

眞宗の寶典たる正信念佛偈もこの地で書かれ、三帖和讃もこゝで著された。その勢力は加賀國主富樫氏の基礎を危くし、血と祈りの數多の爭鬪の後種々の傳説を殘して、遂に富樫を亡ぼして了つた。加賀一揆はこの地を中心にして起り、この寺院故に强固だつた。時は移り人は代つた今日となつても、相も不變加越能は淨土眞宗の本場である。自分は蓮如の數奇な一生を想ひながら、直に海に面してゐるこの寺内を歩き廻つた。お花木・燒米・嫁威しの面をも見た。壯嚴な様な各寺院も見た。毎年四月二十八日から八日間、行忌法要が行はれると。

自分は幼時をこの地方で送つた關係上、この吉崎の

行忌のにぎはひを知つてゐる。老も若いも、最も重要な年中行事の一つとして、數月前から行忌參りの準備をする。當日は臨時列車が立つて、十里を遠しとせずに出掛る人浪は、大聖寺から二里の道に、渦卷き返してゐる。一蓮如に對する信仰は大正の今日と雖も少しも衰へてゐない。

再び門前の茶屋に歸つて、大聖寺への乘合自動車に投じて、坦々たる道を大聖寺川に沿つゝ馳せた。はるかに戰國時代に築かれた錦城山の城跡が見える。

長井・三木・鳥越坂を過ぎて大聖寺の町へ入つた。相もかはらず舊い城下町である。九谷燒と羽二重との名產地である。少時の間をおしまなかつたら、車を捨てゝ小學校裏の錦城山にでも登つたら、思ひ出す昔の事もあるだらうが、自分はたゞ山中へ山中へと——。

湯の匂ひ

山が高うて、山中見えぬ、
山中戀しや山にくや。

田の中を走つてゐた電車が、次第に山へかかつて、空氣が自と爽になつて來ると、山中温泉の蔓が、松の間から見えて來た。

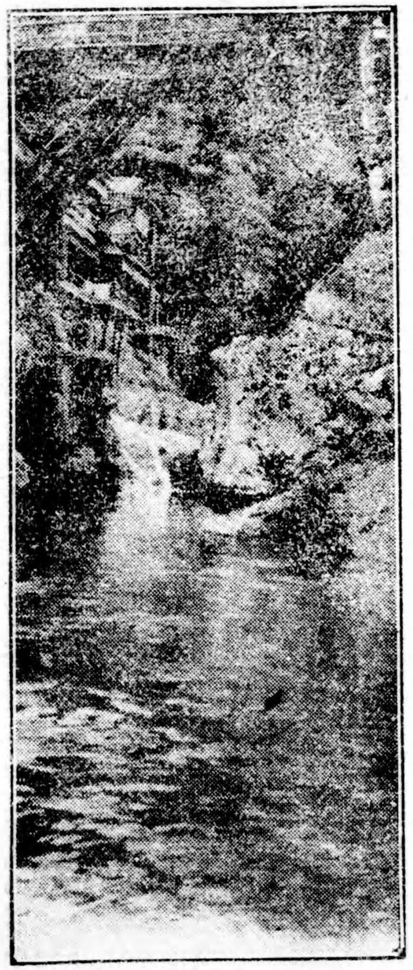
「山中の温泉に行くほど、白根が嶽跡に見なしてあゆむ……」

温泉に浴す。其の功有馬につぐと云ふ。

山中や菊はたをらじ湯の匂ひ

芭蕉が奥の細道に、有馬と比較して書いてゐるこの地は、流石に舊い建物のさびを見せて、四方のせまつた山の景色が、如何にもよく家々と調和してゐる。舊き湯の町、山の町。

旅館に着いて、窓からつい近くの山の頂を眺めてゐると、



蟋蟀橋之景

湯の匂ひ

夕ぐれの靄が、靜に山の凹みにそうて登つてゆく。風が吹けば、あの青嵐が、座敷をも吹きすぎて行く事だらうと思ふと、何とも云はれぬ嬉しい氣になつた。

こゝには内湯と云ふものがない、千數百年以前から、絶えず沸々と湧き出してゐる湯は、三つの浴槽にたゝえられてゐて、菊の湯には、有名なシ、（湯女の異名）が着物を受取る爲に立つてゐる。

以前、家族湯等がなかつた時、すべての旅館の客は菊の湯へ入りに行つた、その混雜をふせぐ爲に、各旅館から美しい仲居を出して客の湯衣を持たせたのであると云ふ。旅の客と湯女の戀、そこに種々のロマンスが殘り、シ、の異名は遠く全國的になつて行つた。

「浴衣肩にかけ、戸板にもたれ、あしでろの字を書くわいな」白鷺の湯は家族湯である。

夕方漫然と街に出て行く。湯の街の匂ひはこゝ程驗著に現はれてゐる所は少いだらう。あらゆるものが湯治氣分を現はしてゐる。路に縞を描いてゐる電燈の光。客を送り迎へする湯女の聲。ね締の音がどこからともなく洩れて來る。門附の流す新内の糸が、温い湯氣に混じて立登つてゆく。仰げば一痕下弦の月が、高い東山の頂にかゝつて、旅の遠さを想はせる。自分は湯の町の氣分につられて旅情を感ずるのであつた」

明の日、曉凉に乘じて蟋蟀橋まで歩いて行つた。町を出はずれた所からすでに淙々の聲が傳はつて、間もなく大聖寺川の清流が、杉の梢を越して腑瞰された。左にそれて橋の上に達すると、三丈の下を奔流が泡を飛ばして流れてゐるのである、閑靜、古雅、快心の境たるを失はぬ。涯下から舟を借りて、急流に棹して下ると岩に激する急流が、渦卷く淵を越え躍る波を渡つて、下流の黑谷橋まで、十町程を運んでゆく、この間幾度か掌に汗して、行きついた時、全身がぞつと寒くなつた程であつた。小規模の保津川下りである。やがてこの地を去つて山一つ越した山代の温泉に向ふ。

夢の國・幻の華

電車を河南で乘り替へて、山一つ越した山代の温泉へ入つて行く。平野を前にひかえ、綠の山山を背ふたこの温泉場は、見るからによく發達して、甍をならべた旅館の様が、整つた感じを與へて呉れた。朱に塗られた三層の建物、重々しい屋根瓦の傾斜、柳の植わつてゐる廣い通。設備

のと丶のつた點から云へば、當所を北陸第一と云はなければなるまい。

落着いた金襖の一室に案内された自分は、直に山代の匂を感得することが出來た。くすんだ緋毛氈、黑塗の鴨居。床の香爐からは、細い二筋の糸がもつれては、高くまで立登つてゐるではないか。庭は自然の山を取込んで苔の有様なぞも而白い。目をつむつてゐると、銀の精金の精が、溫く自分を抱擁してゐてゞも吳れるような氣になつた。山代は幻の華さく夢の國の雰圍氣とでも云はうか。

内湯に浴する。量は至極多くて、乾いた人造石の流し場の上を、絶えずあふれてはながれ落ちてゐる。身體をしづめると、ザツとあふれる湯が、勿體ない程な音を立てる。微鹽類泉だと云ふが、如何にも肌ざわりが軟くつて輕い、何か一句浮びそうなものだなと思ひながらぼんやり顎をなで丶ゐた。

湯から上つた後を、宿の貸湯衣でぶらりと街へ出て行くと、九谷燒を賣つてゐる店が方々目につく、堂々たる構で、可成立派なものが陳ばつてゐる。九谷はもと大聖寺が中心で、中頃この山代に從つて來た。中興赤繪の名はその道の好者なれば決して聞捨て丶置く事の出來ぬものであらう。現今では山中でも黑谷に窯元があつて漆器と共にい丶ものを作つてゐる。

藥王院の境内から服部神社前を抜けて、裏手の萬松園へ登つて行く。美しい赤松と赭土の丘を開いて作られた自然の公園で、規模も大きく、手入もよく整つてゐる。如何にも山代式である。下の六師團陸車療養所の廣場には櫻が咲いて、病兵達がしきりにボールを飛ばせてゐた。

登りつめると可成な台地で茶屋も二三軒ある。風景がよくつて前方にはよく開けた動橋平野を越えて柴山湖が展いてゐる。海も見える。後の方は重々の山又山である。白山の嶺まで、緣の山青い山、紫の山白い山が重なり合つて續き、大きな浪を見てゐる樣である。その間を白い雲が去來する。

急に四邊がシインと靜まり返つた。春の日が照り返つてゐる下を、伐木の音がどこからか、十里の外から聞えて來る。

ゆの山や秋の夕はよそのこと——これは加賀の千代女の句である。

晩酌の後、毛氈の上に寢ころんで仲居にこんな話を聞いた。

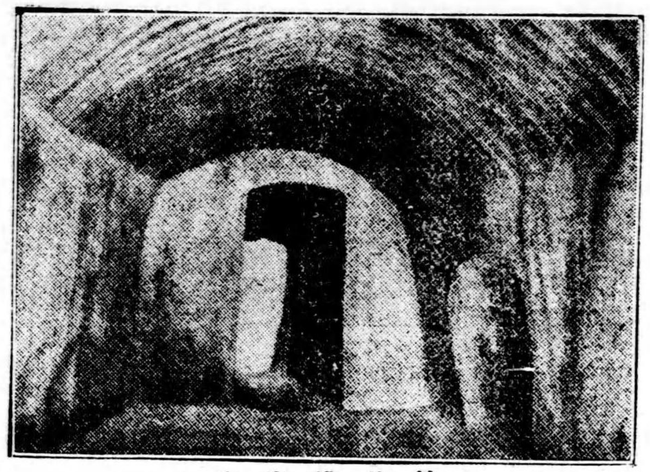
「加賀のシ丶つて、そりや山中だけの通り名やがね。所々で異つた名があつて、こ丶では太鼓の胴つて云ふし、粟津では小鳥とも綿帽子とも云ふのや。又片山津では鴨つてね。」

勅使の横穴

早朝山代を立つた自分は、粟津温泉に向ふ途路、二つの古蹟を訪れることゝした。一は古來有名な那谷寺であり、一は近頃發掘されて世の耳目に上つた勅使村の古墳群である。

勅使驛で電車を下りて山手の方へ歩いて行く、見えてゐる法皇山と云ふのは極めて低い丘で頂には聳えた松がある。高さは六十米突程であるが孤立した丘だけに前方江沼盆地を望んで、動橋川柴山湖の水明を見る事が出來る、丘の四周に横穴式古墳が連續してゐる。數は二十を越してゐる多數に上り、この地方としては珍しい古墳群である。様式は自然の岩山をくり拔いて玄室の他更に一小室を有する二室連絡のものが主で中には三室を連ねたものがあり亦珍とするに足る。内部に松明を點じて入つて行くと二千餘年の空氣がひんやりと頸元を襲つて、鬼氣の自とせまるものがある。大きさに到つては中には入口三尺餘、前室五尺八寸幅三尺、第二前室幅五尺六寸に三尺五寸程となり、次に玄室の入口高さ四尺幅二尺餘の門形を示し中部は長方形で奥壁幅七尺六寸

高さ五尺五寸長軸十六尺二寸、死屍を安置した一尺程の床を有するものがあつて、天井の穹隆も鉋がけの立派なものがある。



勅使横穴内

どんな種族が往古この地方に居住し勢力を得てゐたのか、紀記等にも越の國と呼ばれて特別の文化を有してゐたらしいこの地方にこうして考古學的資料の發見されたのも有難いことであるし、種々の意味で吾人を啓蒙する所があつた。伴出遺物は直刀金環、祝部土器數個を存してゐたと云ふ。

自分はこうした古墳を見廻つた時、千數百年の以前に直に引返させられた様な氣になつて、もと來た道を歩んでゐた。越の國、越の島。船を唯一の交通路として往來してゐた當時の狀も思ひ出される。又朝鮮系統を引く祝部土器が、この地に發見されたこともきはめて面白いことである。多く近畿地方では見ない、九州地方に見る横穴古墳の形式が、この地で發達したことも

その間何等かの意義がなくてはかなはない。考古學的の實證がこうして各地に分明となり古代地方文化の眞相が知れた時、吾人の考へさせられてゐる歴史觀が幻のように消え去るのであろう。

名刹那谷寺

白根が嶽跡に見なしてあゆむ。左の山際に觀音堂あり、花山法皇三十三ヶ所の順禮とゆさせ給ひて後大慈大悲の像を安置し給ひて那谷と名附け給ふとや。那智谷組の二字をわかち侍りしとぞ、奇石さまざまに、古松植へならべ、萱ふきの小堂岩の上に造りかけて殊勝の土地なり

石山の石より白し秋の風

芭蕉翁の奥の細道を讀む度に、自分は今更なつかしく那谷寺の様を心に思ひ浮べるのであつた。岩の上にかけた萱の小堂は、今は堂々たる大悲殿の伽藍となり、種々の人工も加へられてゐるけれども、やはり那谷寺には古い岩石の臭ひがあり、老いた樹木のさびがある。

那谷停留所に途中下車して、村の中を、三丁餘り拔けて寺内へ入つて行つた。入口から老松が薄暗くそびえて、敷石が奥深くつゞいてゐる。自分の足音が、虛空にでも響く様に聞えるのであつた。間もなく池のそばへ出た。中に辨天を祀つた小島があつて、對岸から切立つた山が立つてゐるのである。風化の侵潤を受けた數丈の崖は、或は洞窟となり或は突端となつて、巨人の群の坐した様である。影は和んだ春の水底にうつゝてゐる。

那谷寺大悲閣

寺僧に案内を乞ふて大悲閣の石段を上つてゆく。洞窟に堂を組んで、奥に諸佛の像を藏めたものである。ゆらめく蠟燭の灯に浮び出た、諸(もろもろ)の佛の御姿。本尊は祕佛となつてゐて三十年に一度しか見させないと云ふ。出でゝ反對の岡に登ると三重の塔がある。形は大きくないが相當の建築美を見せてゐる。岡

名刹那谷寺

の頂上からは柴山湖が梢をかすめて見える。

一巡して寺門の茶屋に憩ふと、奈良の古寺をめぐつた時の樣な氣がして、鹿でも出て來ないかと思つた。

茶屋の主人をつかまへて、この附近に蛋白石が出た筈だが、今はどうなつているとたづねると、五六年以前からすつかり出なくなつて了つたと答へた。自分はかつてこの附近まで鑛物の採集に出掛けて來たこともある。こゝの主人は、そんな事を知つてゐる筈もない。

停留所に歸つて電車を待合す。粟津まではもう二十分の距離である。

温泉情緒

粟津驛から湯の町の方へ歩いてゆく。三方山に圍まれたこゝの寮園氣には、自と他境に異つたものがあつて、杉木立が軒近くにまで枝を垂れてゐる。

旅館は各々越智坊川のさゝやかな流を抱いて連つてをり、古めかしい沈着を見せてゐる。長い

廊下を傳はつて客室に案内されて行く時にも、この落着の感じは失くさせられなかつた。梅室の當地の句に「やぶ入りに祖母のうめたる湯の加減」と云ふのがあるが、祖母の聯想を起すのは全く當地にふさはしい氣持だと思ふ。獨り湯の加減が祖母を想ひ出したのではなく、溫泉全體の寮園氣が、祖母の湯を想ひ出させたものであろう。座敷に坐つてゐる自分の耳に、溪流の響と松籟とが守歌のように傳はつて來た。

湯も亦おだやかな肌ざわりである。加減もきびしくなく感じもやはらかだ。

大王寺から養老公園の方へと歩いて行つた。こゝも山代の萬松園同樣、自然の丘陵に道を通じ設備をほどこしたもので、感じもやゝ似通つてゐる。共に溫泉場としてはまとまつた公園を持つてゐるものだ。頂上に行基菩薩の銅像があつてこゝの舊い創期を物語つてゐる。

夜になつて、食事を運んで來た女中から又小鳥の話を聞かされて、北陸の藝者も一度呼んで見なされと云はれてその氣になつた。

現はれた妓は色の白い眼のうるんだ女である。

何か歌ひませうかと三味線を取上げたが、藝のあろう筈もなく、すぐいそぶしか何かの流行歌になつていつた。そんなものよりはこの地方のものはないか、山中ぶしと云ふのがあると聞いたが

と云へば、卽座に歌つたのが次の歌であつた。

お前見染めえた去年の五月
五月菖蒲湯の湯のを中かで

それから又

山中山しろ粟津の湯うでも
惚れたやまひわ癒りやせぬ

地方の歌をその本場で聞かされる程、心を動かすものはない。自分は旅で數日を送つて、心もやゝ感傷的になつて居て種々の連想を呼起した。こゝは、溫泉と歡樂と女とに育くまれた土地である。轉々として移り行く女達の、悲しい想は歌となり果敢ない歌は物語となつて、この溫泉ぶしを釀成したのであり、この氣分を釀成したのであろう。自分は泪を流さん計しになつて、その哀音に耳を傾け、すべてを忘れてやる瀨ないようなその情緒にひたつた。

醉もまはつた、心も和んだ、さあ戸外に出でゝ大自然の氣にふれようと、よろめく足を小暗い山の公園に拔けて行けば、山は太古のまゝに靜であり、月は細く光つてゐる。星の運行の狀が見えてゐるようだ。この時初めて、自分は北陸の溫泉情緒にふれた樣な氣になつた。

片山津溫泉

湖の出湯へ

粟津驛から汽車で、動橋まで引返し新に通じた聯絡電車で七八分も運ばれるともう片山津の溫泉である。

こゝは自分にとつて、忘れる事の出來ない搖籃の地であつた、が、故郷を捨てた自分は幾年ぶりかで今こゝを訪れた來た。當時の人々はどうしてゐるか、當時の樣は尙殘つてゐるだろうかと、電車の進むにつれて色々の思が胸に湧起つて來るのであつた。

街の樣は自分の想像を裏切つてゐた。當時は後の埋立地もなく柴山湖の水が直に旅館の石垣を洗ひ、山は家の軒近くまでせまつてゐたが、何と云ふ變り樣だつたろう。こんなに家數も殖え町も立派になつてゐる。友人を訪へば、もう父も死に子供まで出來て

ゐると云ふ始末である。

湖に面した宿の一室に旅服を脱いで、後の藥師山に出掛けて行つた、切擴げられた砂の崕を石の段々で登つて行くと松の間に藥師堂が見える。前面の景は廣く開けて、湖の上を行く船の水棹對岸の村々。平野を越えた白山の山々なぞが、昔にかはらず美しく展けてゐる。

自分は嘗てこんな讃辭を故郷に呈したことがあつた。

「試に土地の大觀を得られる藥師山に登ると、今江湖に連る一筋の白線を起點に、その展望は二分されてゐる。右は打平けた田を越えて、麓をつゝんだ數重の綠の山の上から白山が姿を現し、左は日本海特有な砂丘の色が濃き松を戴て岸にせまつてゐる。……

で山の倒の影も壯嚴だが、白い砂丘の水に浮んでゐるのも特異な眺めである。湖の色はにぶい青綠色で、菱の葉の浮いた間を、四ッ手をあやつる漁船の去來するのも面白い——

拙著「溫泉案內」より

自分が歸つて來たと聞いて、それでも忘れずに訪ねて來て呉れる土地の若い人が四五人あつた。その人達と、舊い記憶をたどりながら色々と夜も更けるまで語り合つた事であつたが、中でも自分の心の引かれたことがあつた、それはシヽと呼ばれ鴨と稱されてゐる彼等湯女の身上であ

る。わたしの記憶にある十中の九まで、今はどうしてゐるやら次から次へと淪落の影をおとして行つたと云ふ。彼等の裡の美しい者は、互に意氣地を競ひ一時に數十人の渴仰者を擁してゐるのであるが、其壽命と云へば誠に果敢いものである。盛がすぎれば見返つてやる者はない。百人に一人は都人の隱女にでもなつて一時生活の安定は得ようが、まごつけば娼妓にでも身を崩すか、又は行方が知れなくなつてしまふのだ。

自分には事件の良否を判ずる力もない、どうにでも考へてやれる者でもない。旅から旅をゆく風來人。然し多少でも昔名を聞いた事のある人々の、こうした凋落を、無關心では聞く事は出來なかつた。溫泉情緒の犧牲にはちと大きくはないだらうか。

篠原懷古

溫泉を東北へ出はづれて、湖にそつて七八丁も行くと人工的の堀切に達する、その先に小高い砂山があるが、土地の人は之を手塚山と呼んでゐる。

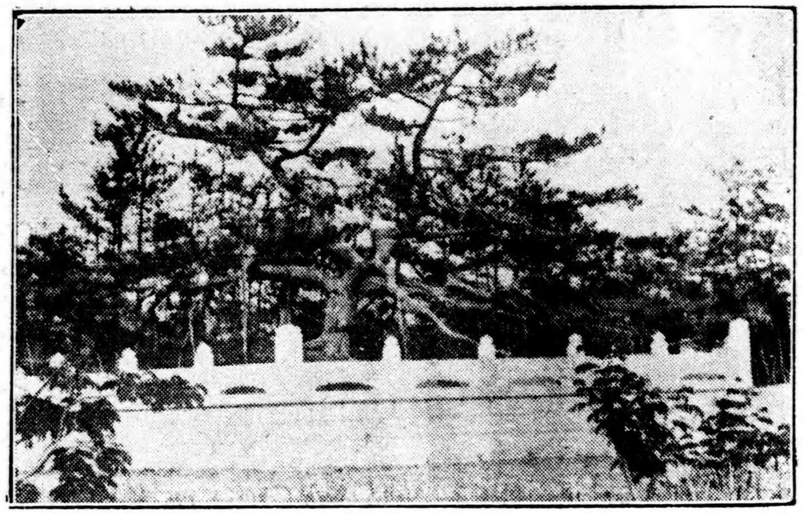
源平盛衰記か、平家物語をでも讀まれた方はくはしいと思ふが、壽永二年五月二十三日の丑の刻、流を盡し林を燒いて狩集めた平家の軍勢十萬餘騎は、木曾義仲の軍勢にもろくも打破られ、倶利加羅から洪水の如くに、この所まで退却して來たのであつたが、この地で少時陣立を直そうとした。中に先達長井の齋藤別當は打死を覺悟と髮を染めて、あはれ手塚太郎光盛に打て取られたのであつた。光盛は首を大將義仲に獻じ、義仲は自分の育ての親の死を悲しむ。軍記物語中出色の文字であつて、後世數百の人々の泪をしぼつた。

さては染めて候ひけるぞや、あらはせて御覽じ候へと、涙もせきあへず申たりければ、木曾殿誠にもとて加賀國なりあひの池にてあらはせて見給へば、げにも白髮にこそ成りにけれ

——平語——

手塚山も年々低まつて行く。崩れた砂は下の首洗池を四分の一に埋めて（文中指す所のなりあひの池か）近頃ようやう保存會の手で石垣を作られた。山には保安林が植えられた。

堀切に添つて四五町行くと海岸近くへ出る。その濱松の間に實盛塚があるのである。今は四方を石垣でつまれ、大層立派に出世した。自分ははしなくもよく亡父に連れられて來た當時の荒廢し切つた塚の有樣を描いて見た。謠曲實盛に見える亡靈の話なぞは十年前の塚の方がよいが、勿



篠原實盛塚

論保存の爲なら今の方もよかからう。

昔ながらの墓碑に「法名萬松院殿覺翁禪門。應永二十年逝行十四代太空上人之建。（一首の和歌を記して）六道の苦げんを救ふこの文字唱へて吳れよ參る人々南無阿彌陀佛」とある。

濱の方へ出掛けて行つた。陽炎の立つ砂利の上に坐して、橋立三國、安宅能登の出鼻をぼんやり眺め暮した。日は輝き、波は躍つて、强い磯の香が鼻を襲ふ。海面はいよ〳〵碧瑠璃色に純んでゆく。

自分は兩足を投出して空を眺めた。白い雲が一つ漾うてゐる。遊子故鄕を悲むか。

つい近い所で地引網を引出した漁師の一群は、昔のまゝに下帶一つで歌ひながら網をひいた。

えつさか、ほい。ほい。やつさつさ。

えつとさつさの、ほいさつさ。

和倉への旅

片山津を後にした自分は、直に今一つ殘つた和倉溫泉に赴く可きであるが、車窓にうつる左右の景の、特に興味を感ずる樣なものを申述べようと思ふ。

粟津驛を過ぎると左に一つの湖が見える。松をすかせて見たこの木場潟は常に平穩で、上には白山の全き姿がそびえてゐるのである。どこから見た白山よりも、特にこの地の姿がよいと云つていゝであろ。手取川邊でのながめも捨て難うはあるが。

小松町につく。齋藤實盛の兜がこゝの太田神社に祀つてあると云ふ事は、奥の細道にも見えてゐる。

（小松と云ふ所にて）

しほらしき名も小松ふく萩すゝき

此所の太田神社に詣づ。實盛が甲錦の切あり、往昔源氏に屬せし時、義朝朝臣より賜はらせ給ふとかや……

實盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて此社にこめられ侍るよし、樋口の次郎が使せし事どもまのあたり緣起にみえたり

むざんやな甲の下のきりぐ〜す。」

驛から半里計し行つた海岸に安宅がある。安宅の關の物語は何人の胸にも浮び起る有名な話で、兄の邪推をぢつと一心におし抱いて、はるぐ〜奥州に逃れ行く義經の心中もあはれなら、最後まで主に殉じようと云ふ家來も大抵ではない。話は種々に脚色されて李園花柳の地に用ひられてゐる。幸四郎の勸進帳を見た時、自分はつくぐ〜藝術の永遠さを思はないでは居られなかつた。地理上の關跡は、すでに半里の海底にあるとされてゐる今日。藝術化された安宅のみが何人の心にも深い感銘を與へでゐるのである。

（謠曲安宅の一節）

本來勸進帳はあらばこそ笈の中より往來の卷物一卷とりいだし勸進帳と名付けつつ高らかにこそ讀み上げけれ。夫れつらつら惟ん見れば大恩教主の秋の月は涅槃の雲に隱れ、生死長夜

の長き夢驚かすべき人もなし爰に中頃に帝おはします御名をば聖武皇帝と名付け奉り……」

こうして辨慶はまんまと富樫をあざむいて奥羽に逃て行くのである。

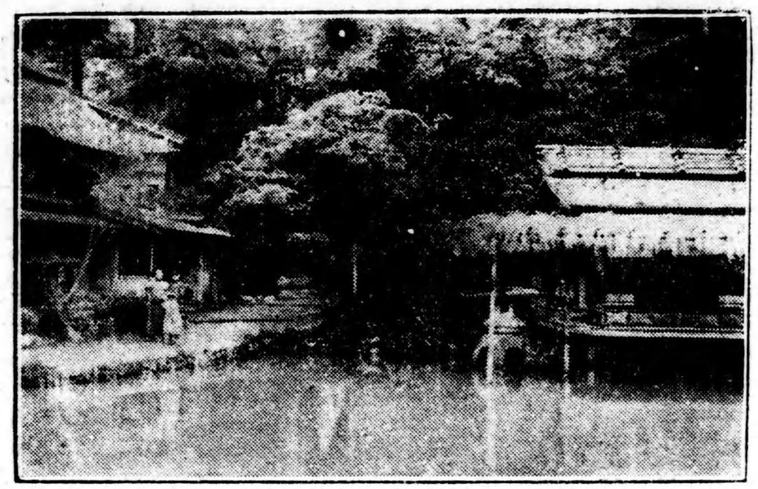
美川驛につく前、汽車は白砂青松の海邊を走る。夏は海水浴の爲の臨時驛が出來るので小舞子と名付けられてゐる。手取川も近くにあり、古い港町の美川もつい鼻の先だから、一日の遊びには面白いだらう。

金澤市に近づくにつれて、梨畑の棚が眼につく、犀川の流を越すともう百萬石の城下に入るのである。

當市は北國一の都會と云ふのみでなく實に面白いカラーの殘つてゐる土地である。自分はこの土地に一年計し住んでゐたが、何年經つてもこのカラーのみは忘れられないのであつた。獨兼六公園が立派であると云ふのみではない、生活の易い所だと云ふのみではない。

能樂と謠曲と百萬石氣分で三百年間養はれた當所は建築に氣風に、風景に言語にあらゆるものに獨特の色彩を濃く持つてゐて、德川時代の風が今でも吹き過ぎてゐるのではないかと思はれる節が多いのである。

自分は小立野の高臺に行つた。市街が梨の花と白い菊花のような屋根石でみたされてゐる。兼六公園の花には遲かつたが、それでも遲れ咲きの花辨が曲水に浮んで流れてゐた。霞ヶ池のほとりからは　昔に變らぬ風が吹く。藩祖を祀つた尾山神社の庭園の狀も奥ゆかしく、明に外國建築の影響を受けた三層石造の樓門が、奇妙な姿で立つてゐる。卯辰山の若葉をも是非訪れたかつた。こうして途中下車の心算で降りた金澤市に、ゆくりない旅の一夜を明かす事になつた。



金澤兼六公園

夜、市の中央部とも云ふべき香林坊から犀川べりまで散歩した。香林坊の赤提灯の火。片町通りは電車で擴張されて全く見違へるほど堂々たる通りとなつた。犀川にもコンクリートの橋がかゝつたが、水は昔の純んだまゝの流である。畫なれば兩側の柳並木も風情があらうと思はれる。歸途明るいカフエーで、都へ歸るまで味へぬと思つたコーヒを口にした。

明けの日早々にこゝを立去つて和倉に向ふ。

この地から西北二里、電車のついてゐる金石の港は我國外國貿易の先驅、錢屋五兵衞の出た土地である。時代に容れられなかつた彼の一生も不運であつた。尋ねて弔ふ可きではあるけれども、今はその機會を得られない。

海を前にして

金澤から七尾線に乘じた自分は、松林と砂丘の間を二時間ゆられながら、過した一週間の旅の事を思ひつゞけて行つた。五つの温泉五つの名所。何れも劣らぬ樂しいものであつたが最後に今一度、ゆつたりとして温泉氣分にひたつて見たかつた。都に歸れば再び塵を浴びて馳巡る自分達である、せめては一日でも長くこうした氣持をつゞけてゐたい。そう思ふと未だ見ぬ和倉の有樣が、幻に浮ぶ氣さへするのであつた。

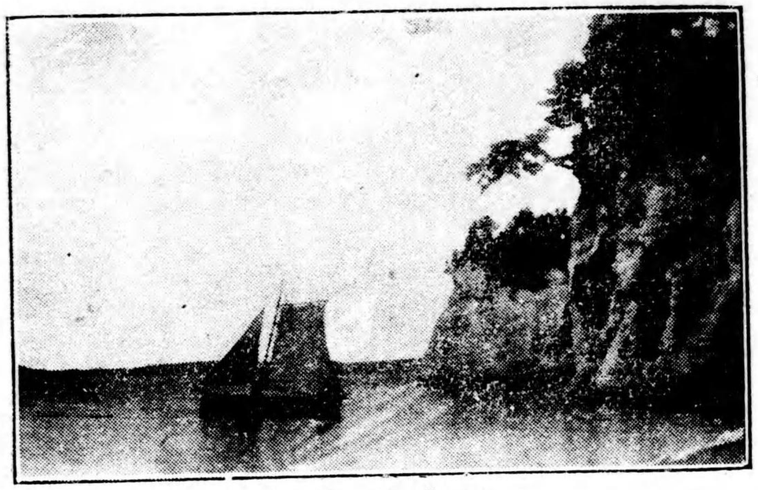
七尾町につくとすぐに港の方へ俥を走らせた。存外に整うた街の有樣が意外の感を與へるのであつた。七尾城趾が近くにあると聞いたがそれも止めだ。たゞ和倉へと……。

港には汽船がついてゐる。七尾灣の美しい景色はその進行につれて開展するのであつた。

「あれが屏風崎です」

默想してゐる自分にそう云つたのは商人體の男であつた。船は隨分と七尾を遠ざかつてゐる。ふと目を擧げると、はつとして自分は身がすくもうとした。能登島の岩壁と本陸の方から突出した絶壁とが、肩もふれん計しに前面をさへぎつて、僅な隙間から、一脈の水の連つた前景が覗かれるのみである。船はぐん〳〵とその間を進んでゆく。それでも近附けば相當の間隔もあるのだが、遠くから見てあまり狹い岩が自分を驚かしたのであつた。

打開けた前方には、もう海に臨んで和倉温泉の家々が見えてゐる。海上からの美しい市街の眺は、九州別府溫



和倉屏風岩

温泉めぐり

泉のそれの様に大まかではないが箱庭を見る様に隨分きれいだ。

棧橋に船がつくと、宿の仲間が賑かに笑ひさざめきながら客を物色してゐる。何と云ふ可愛いゝものがこゝにも居ることだらう。時は四月、北陸の海も紺碧に靜もつて、日がキラ〳〵と輝いてゐる下に、若い女連が笑ひさゞめいて自分達を待つてゐて呉れる。他のものは何も要らない、たゞこの港場の感じがなつかしくてならぬのであつた。

導かるゝまゝに一室の客となつた。開放たれた縁側から、今來た海が一面にひろがつて見えてゐる。七尾からの船はあれだ、荷物船遊覽ボート。赤い旗が空にひらめく。能登島を抱いたこの灣内は至極靜で、油の様な波が續いてゐる。島まで、岸まで、向ふの縁した山々まで、九十九灣の勝も探ればこゝからは近い筈である。

やがて夕日が眞赤に浪を染めて、目にふれるもの一切が金の如く輝いた。戸々の窓には灯が入つた。三味線の音がどこかでする。それにまざつて、下で湯を浴る音が。くゝく、と。又しても若い女の忍び笑ひにまざる。夕の化粧する女中達の湯あみの聲であらうか。ある艶めかしさが潮の香と共に温泉氣分を漂はすのであつた。

海を前にして

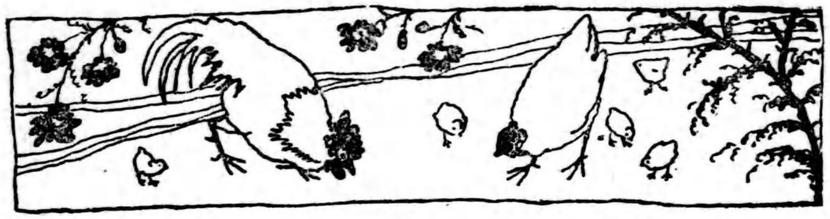
× × ×

七日の旅も終つた。自分の宿望も達した。樂しい一週間であつた。北陸の温泉よ、健全に發展して行つて呉れ。

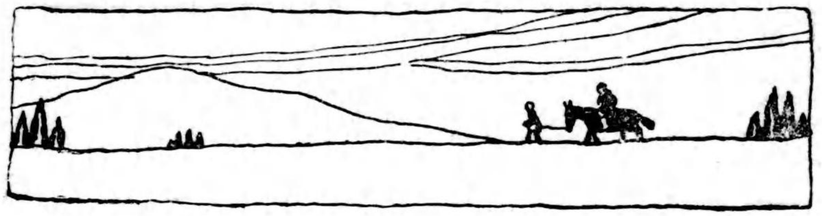
温泉と俚謠

◇三國ぶし

○三國〳〵と通ふやつ馬鹿じや　おびのはゞほどある町を。
○盆のお月様はまんまるこでまるい　まるてまんまるこで角がない。
○酒は酒やで濃い茶は茶屋で　三國小女郎は松ヶ下。
○岩が屏風か屏風が岩か　海女の口笛東尋坊。
○三國祭はめゝじやこ祭　そうけ持てこいすくてやる。

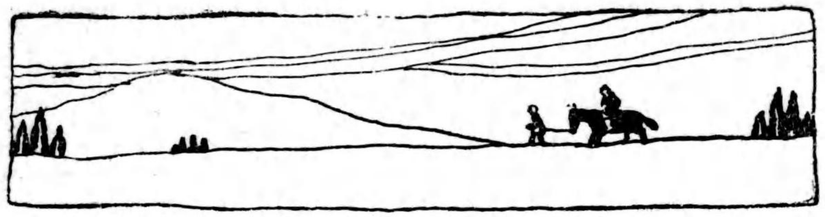


○米のなる木でわらじを作り　歩きや小判のあとがつく。
○さても見事な安東の小島　地からはえたか浮しまか。
○地からはえもせず浮もせず　昔古代からある島や。
○傘を置いて來た敦賀の茶屋で　西が曇れば思ひ出す。
○主がまつまのあの東尋坊　心とゞろく浪の音。
○姉にさゝせたら妹にさゝせ　同じ蛇の目のからかさを。
○厚司縄帶腰には矢立　問屋通ひの程のよさ。



◇山中ぶし

○忘れしやんすな山中道を　東や松山西や藥師
○藥師山から湯座屋を見れば　シシが髪結て身をヤッす
○桂清水で手拭拾ふた　これもやまなか湯のながれ
○桂地藏さんにわしや恥かしや　別れ泪の顔見せた
○浴衣肩にかけ戸板にもたれ　足でろの字をかくわいな
○山が高うて山中見えぬ　山中戀しや山にくや
○谷にや水音峰には嵐　あひのやまなか湯のにほひ
○藥師山から清水を見れば　シシが水汲む程の好さ
○今宵も來ぬかと月くろたにの　ぐちを岩間の水の音
○飛んで行きたいこほろぎの茶屋　戀の棧二人づれ
○送ましよか送られましよか　セメテ二天の橋までも



○傘をわすれて二天の橋で　西がくもればおもひ出す
○お前見染めた去年の五月　五月菖蒲湯の湯の中で
○病ひなほしのやまなかなれど　病もとめた人もある
○加賀の山中おそろし處よ　夜の夜中にシシが出る
○山中山代粟津の湯でも　惚れたやまひは癒りやせぬ
○鐵砲かついで來た片山津　かもも打たずに空戻り
○主のおそばと蟋蟀橋は　離れともないいつまでも
○忘れ草とて三味線ひけば　節と文句で思ひ出す
○今夜逢ふと思へば嬉し　待つは山代藥師かね
○湯つぼ深いけど底まで見える　わしと殿ごの底知れぬ
○お湯の流れで浮名を流す　湯つぼなりやこそ人知らず
○粟津湯所不思議なところ　小鳥や夜中に餌をさがす
○鳥はとりでも粟津の鳥は　男喜ぶきげんどり
○春の霞に帶仕の山は　とかぬすがたがしほらしや
○忘れしやんすな片山津道を　ひがしや湖水で西藥師

◇小原ぶし

○小原小原節やどこでもはやる　わけてこの町はなほはやる
○飛彈の高山たかいとは云へど　山は高こない名がたかい
○竹にすゞめはしな好くとまる　とめてとまらぬ色とよく
○をせやをせをせぇ下關までも　をせば港が近くなる
○月は滿月夜はよいけれど　主にあわなきやしんのやみ

（後ばやし）

○來たよでこんよで面影立つよで　出て見りや風だよ笹の葉にだまされ
○越中で立山加賀では白山　駿河の富士山三國一だよ
○三千世界の松の木や枯れても　あなたと添はなきや婆婆へ出たかいがない
○お前に一心猫にはにつしん　越後のけんしん負けたが殘念

温泉ところぐ

交通・風光・沿革・現狀
泉質と効能・名所と傳說

一、蘆原温泉

蘆原は福井縣坂井郡蘆原村大字二面の地にあつて、省線金澤驛からは一里、福井市から五里あまりの位置にある三國線最初の驛である。

地形は福井平野の北端で、背後には大日支脈の小丘をひかえ、遠く田を越えた前面には、越前海岸山脈が海との隔てを仕てゐる。で氣候は平温風景は長閑で、秋の頃なぞ諸方から傳つて來る百姓の野良歌が、牧歌的氣分を漂はしてゐる。月のころには影が田毎の水にうつり、虫の音も繁

い。足を一歩外にすれば三國の古邑、東尋坊の奇勝がある。

この溫泉の沿革は、古い歴史を持つた北陸溫泉中きは立つて新しく、明治初年頃は荻萩の生ふた沼地であつたのを、何時となく溫泉が湧くと云ふ噂が立つて、何でも地を埋めたのは十七年春の頃であると。それからは次第に人家も増して行き田を埋めて高壯な旅館が軒を並べる樣になつたのである。それ故に舊態のない今日でも、こゝは何處かに新しい明るさを持つてゐる。

この發展を見たと云ふのは、想ふに溫泉に乏しい福井縣であると云ふ事と、幾分でも近畿東京の方に近い位置にある爲であらう。目下人口二千、旅館十數軒にも及んでゐる。

宿泊料金は低廉で二圓五六十錢から五圓程までゝ、土産物には蘆原燒溫泉菓子の類がある。

〔泉質と效能〕

本泉は食鹽泉で無色清澄、微弱アルカリ性反應を呈し比重一、〇〇八五分析表によれば成分左の如し。

分析表

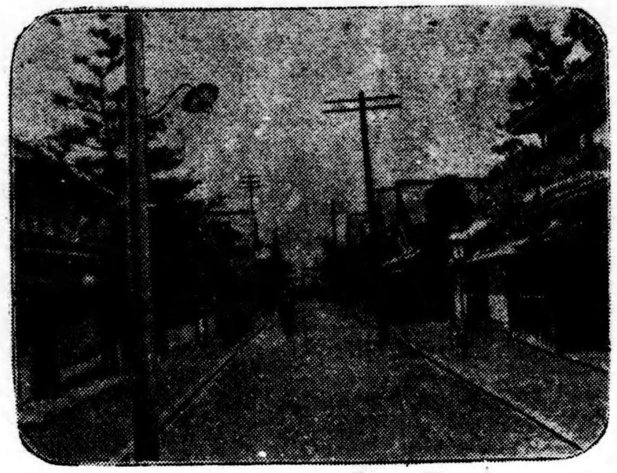
クロールナトリウム	五、九〇四一分	クロールカリウム	〇、二一九三分
クロールカルチウム	三、一五〇一分	硫酸カルチウム	〇、五二二一分
硫酸マグネシウム	〇、〇二一三分	重炭酸マグネシウム	〇、〇〇〇五分
重炭酸亞酸化鐵	〇、〇〇二二分	クロールアムモニウム	〇、〇〇六三分
硅酸	〇、〇八八八分	硼酸	〇、一四〇七分
游離炭酸	〇、〇五三七分	之他含有ラヂウムエマナチオン量はマッヘ單位を以て表すと三九、三の多量に上る。	

溫泉效能　重な效能は神經痛呼吸器病病後衰弱等に特に現れてゐる、

醫治效用

一、神經系統疾病。二、筋骨及關節疾病。三、多血病肥胖病腺病等の營養障害。四、呼吸器病。五、消化器病。六、男女生殖器病及泌尿器病。七、皮膚病。

（入浴後冷水を以て身體を洗滌すべからず）



蘆原溫泉

〔名所と傳說〕 土地が新しいだけに、傳說の著しいものもないが、近傍に種々の勝地をひかえ四五日の遊覽には事を缺かない。

三國＝以前は坂井港と云つて、その名は早く光仁朝の頃から文書に見えてゐる。水路誌に「安島崎南二海里川口（九頭龍川）より防波堤斗出し云々」とあり、和船時代の要港であつた。今も海水浴場、櫻の名所として有名である。こゝの遊女の話も種々の巷談を作り、三國小女郎の樣な名妓も出れば、近松の淨瑠璃本にも見えてゐる。二十四輩順拜圖會に「三國の傾城町は古き名所にして今も出村上町地藏町など多くの遊君花の如く粧ひ糸竹の調も都めきて旅人の憂を忘るゝよすがなりけり」云々と。

三國神社＝武烈天皇崩御の時、後繼者がなくつて方々探し廻つたが遂に越前三國の宮に居られた皇子を位に卽けたと云ふ話は日本書紀の後に見えてゐる面白い話の一つであるが、その皇子繼體天皇と大山昨命を共祀したのがこの社である。小高い丘にあつて海を望み風景もよい。

瀧谷寺＝同町字瀧谷にあり新義眞言の名刹である。後圓融帝の永和三年に、作州の高德背憲上人が開山されたものと傳はつて、一時は寺領五百石にも及びこの附近では中々に勢力のある寺であつたが、宗教一揆に燒け落ちて、現在ある建物はそれ以後のものである。種々の寶物が多い。

東尋坊＝前述の通り。三國から徒步で一里近くある。船を用ひても行ける。

北潟・吉崎御坊＝前述。蘆原―北潟（一里半）湖上（二里）吉崎―大聖寺（一里半）山中まで出るにはやはり一日の旅程である。

永平寺＝蘆原からは少々引返しになるが北陸隨一の名刹、求めてゞも行く可き所である。福井市から勝山方面へ通じてゐる越前電鐵で永平寺驛まで行く、こゝから更に北へ六十町（この間人力車七十五錢・自動車五十錢）曹洞禪の大本山永平寺に著く、道元禪師の開山されたもので境內の老杉森々として枝を交へ、七堂伽藍立並んだ樣は實に立派である。早く出れば日歸りも出來禪坊で泊めても呉れる。

二、山中温泉

山中温泉は、加賀國の南端江沼郡の中央にあつて、大聖寺川の溪谷のようやく開けようとする所に位置してゐる。

北陸本線大聖寺驛で下車すれば、構内からすぐ溫泉聯絡電車の便がある。片道三十分賃金二十九錢である。

出湯を繞つて建並んでゐる山中の町は、全戸數八百、人口四千を越えて、旅館商店官署水力發電所等、宛然小都市の趣をなして群在してゐる。

四圍は水無、小富士東山等の緣濃い山々にせまられ、一方大聖寺川黑谷川の清流は東南の山脚を洗つて流れ去るあたり、奇岩怪石が多く一の幽邃境を形作つてゐる。

この溫泉は千二百餘年の昔に、僧の行基が開いたものだと云ひ傳へられてゐるが、其後一時中絕して世に聞えてゐなかつた。治承年間になつて、江沼郡塚谷保を所領してゐた長谷部信連が、鷹狩の際、白鷺が葦原の流に傷いた脚をひたしてゐたのを見て、靈泉の湧出したのを知つたと云ふ傳說がある、信連は家來をして荊棘を掃はせこゝに浴場を設けたと云ふ事で、今でも溫泉浴場の棟には九曜星の長谷部の定紋をつけてゐる。それからは次第に世間に知られて行つて、芭蕉が東北紀行の時にも久しく此地に足を止めて湯の效能を書立てゝゐる。

現今旅館の數は二十二軒、何れも設備がよく調つて、流石歷史附の土地であると想はせる。浴場は町の中央に三棟あつて、菊の湯、葦の湯、白鷺の湯と呼ばれ、旅館には各自内湯を持つてゐない。

白鷺の湯は未だ木の香新しい建物で、家族浴槽が十個あり、休憩室其他設備の見るべきものがある。葦の湯は明治二十三年の建築で、内は靜な時代のさびを見せてゐる。菊の湯は當溫泉が創つて以來この場所に建つてゐるのだと云ふ事で、因緣も深く中で宏壯である。一時によく數百人を容れ得ると云ふのと、こゝに浴する客が年に十萬を越えると云ふのが御自慢だ。特に御自慢なものは湯女で、餘程以前からこゝへは艶裝した女中を出して客の浴衣を持たせる事になつてゐると云ふが、一時に數十人の客の着類を持ても決して間違へはしないと。但、この湯女が山中のシシとして全國的に有名になつたのは、その爲ではなかつた。

山中黑谷橋附近

宿料三圓から六七圓まで。土產物には山中漆器九谷燒がある。また大聖寺川產の川魚も有名である。

〔溫泉と效能〕

こゝの溫泉は鹽類泉で、ラヂウムの含有量も極めて多量であると云ふ。

山中鑛泉分析書

一、鑛泉　一種　江沼郡山中町ハノ百六十三番地湧出

本泉は無色透明の液にして無味微に硫化水素臭を放ち弱アルカリー性反應を呈し氣溫三度の時攝氏四十九度半の溫度を有す比重は攝氏十五度に於て一、〇〇二一なり今本泉一「リーテル」中に溶存せる各成分は左の如し

一、固形分總量　一、四六四七瓦

一硫化水素	〇、〇〇一二瓦	一酸化ナトリウム	〇、一三四四瓦
一格魯兒	〇、一二四三瓦	一酸化カルチウム	〇、三三三八瓦
一無水硫酸	〇、六〇六一瓦	一硅酸	〇、一六五四瓦
一酸化カリウム	〇、一〇七六瓦	一酸化鐵及苦土	〇、〇一二〇瓦

古來山中は脚氣病の特效を以て知られてゐるが其他の醫治效能は左の如し。

外傷、脚氣、慢性消化器病、僂麻質斯、神經衰弱、神經病、慢性皮膚病、慢性呼吸器病、慢性腎炎、糖尿病、膀胱加答兒、痳疾、梅毒、婦人生殖器病

（注意）一日の入浴度數二三回　朝は七九時晝は三五時、夕は六七時がよい。一回三十分迄。服用は一回三十乃至六十瓦。一日三回迄

〔傳說と名所〕

醫王寺＝國分山醫王寺は僧の行基が草創したと云ふ古刹で、水無山の中腹にある。本尊は藥師如來、行基自刻のもので一時地中に埋もれてゐたのを長谷部信連が開湯の折堀出したと云ふ有難いゆわれ附のもの。こゝからははるかに日本海を望む事が出來て、眺の開けた所である。浴後の散步には適當であらう。又國寶たる古九谷金剛童子を藏してゐる。

蟋蟀橋＝山中と云へばすぐに蟋蟀橋を想ひ出す程世間に知られた名所であつて、大聖寺川數丈の高さに掛つた橋である。直下は淸流激奔巨石壘重。秋のこほろぎがこんな風流な名を附けたものである。

主のお側と蟋蟀橋は離れともなや何時迄も

小富士嶽＝俗に富士寫嶽と云はれてゐて、背後をつゝむ連峰中秀でた姿を見せてゐる。山腹に不動地藏釋迦を祀つた小祠がある。

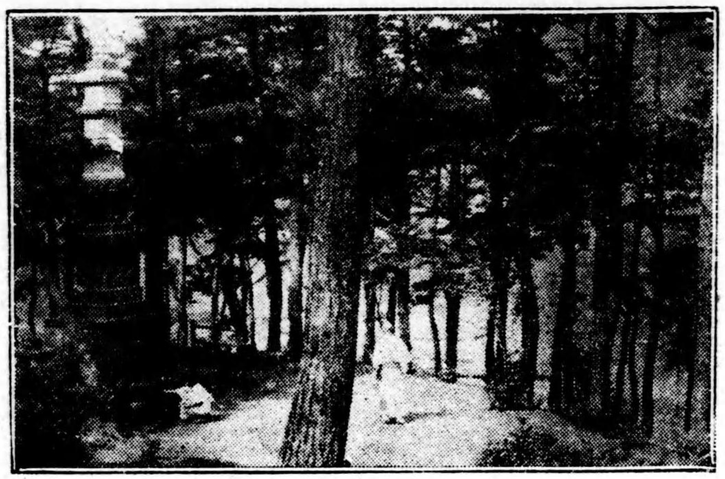
采石巖＝蟋蟀橋の下流にあり、その狀は奇古と評す可きであらうか。大窪詩佛が三字の名を巖に彫ませたのも名物の一つとして殘つてゐる。

道明淵＝更に下流にあつて、巨巖が深淵に臨んでゐるあたり自と幽邃の氣が漂つてゐる。芭蕉翁の「山中や菊も手折らぬ湯の匂ひ」の句碑はこのあたりの荆棘の中に立つてゐる。

黑谷橋＝蟋蟀橋からこゝ迄の間にあらゆる山中湯泉の勝景が集められてゐる。夏ならば舟で下るのも面白い遊びであらう。又ビールの滿を引くによい。翁堂のあるのもこの附近だ。

三、山代温泉

山代は江沼郡山代町の地にあつて、山中とは山一つ隔つた所にある。大聖寺動橋から各一里餘溫泉電車の便がある。(省線乘替驛は動橋)



山代萬松園

地は一方藥師山一帶の高阜を負ひ、三面動橋平野をへだてゝ大聖寺川柴山湖の水に望んでゐる。朝夕霞の棚引く樣、牛追ふ聲に飛立鳴なぞ、牧歌的氣分が横溢してゐる。背後の山も嶮阻ではないが、萬松梢を交へて、一度足を踏込むと深山の趣がある。萬物靜、伐木の音の遠く十里の外に聞える樣な長閑さは、この地を踏んだ騷客ならでは說き示す事は出來ぬだらうが、一度仰げば白山連山の秀嶺に對し、俯しては日本海の碧きを望む趣は話だけでも感ずる事が出來るだらう。

沿革は山中同樣聖武帝神龜二年（約千二百年前）僧の行基によつて發見されたと傳へられ、花山法皇も北國巡遊の途次立寄られたと口碑にある。史に明に見えてゐるのは鎌倉朝の時加賀の國司富樫氏同姓泰信が、こゝで居を構へ山代泰信と稱したとあり。戰國時代に

入つて越前の朝倉義景がこゝを侵してゐる。

物語の人物明智光秀が朝倉に仕へてゐた時分、病を得て長崎稱念寺の僧園阿と共にこの溫泉に湯治したと云ふ事が、明智軍記に見えてゐる。時たま永祿八年五月で、三好松永の黨徒が主家足利將軍を斃つたと云ふ報が傳はつたので、光秀は終日風敎壞廢した時世を歎じてゐたと云ふ。傳說の中では光秀は全然反逆の子になり切つてゐるが、彼の敎養見識人物から見ても當然の事と思はれる。

明治に入つても有栖川小松宮等の御來浴があり。今や山代はおしもおされぬ全國一流溫泉になつてしまつた。

旅館は現今十七軒、戶數五百、設備の點は到れり盡せりだと申してよい。恐らく初めての方は意外とされるであらう。一泊三食附三四圓から六七圓まで、土產物としては有名な九谷燒あり他に漆器煉羊羹等。

〔泉質と效能〕

弱鹽類泉で、無色透明、微に硫化水素臭があるが大へん入り心地のよい湯である。溫度攝氏六十六度より七十三度まで。

クロールナトリウム(食鹽)	〇、四一七八	クロールマグネシウム	〇、〇〇六三
炭酸ナトリウム	〇、〇二七七	硅酸	〇、〇六九〇
硫酸カルチウム(石膏)	〇、三九八三	硼酸	僅微
酸化鐵及礬土	〇、〇〇二五	アンモニア	痕跡
燐酸	痕跡	遊離及半結合炭酸	僅微
硫酸ナトリウム(芒硝)	〇、六八七四	硫化水素	〇、〇〇一六
クロールカリウム	〇、〇二三八		

リウマチス、中風等によろしく陸軍では特に轉地療養所を建てゝゐる。ラヂウムの含有量多し

(浴用)

筋及關節リユマチス　婦人生殖器の慢性諸病
慢性濕疹　腺病
ヒステリー　腎臟病
脊髓勞　膀胱カタール
半身不隨　黴毒

(內用)

輕症胃カタール　胃痛
下痢催進の腸カタール

山代溫泉

藥王院

〔名所と傳說〕

藥王院＝眞言宗の古寺で、長德年中花山法皇の建立されたものであると、現存の堂宇は弘化四年改築、莊嚴とは云へぬが古びて神さびしい。境内には老椎櫻樹が多い。

盛沸湧空井入池、作煖波時々含瑞氣往々滌沈痾、大抵無嚴冷自然有太和、要明妙觸處問取跋陀羅（黃檗高泉碑文）

服部神社＝和銅年間の勸請で、天羽槌雄神、菊理媛が合祀されてゐる。延喜式にはすでに名の戴つた程の古刹である。正面九十級の石段を登つて行くと老松枝を交へた境内に達する。萬松園はこの裏手の丘から初るのである。

萬松園＝大平山、馬船山、藥師山一帶の地を開いて作つた公園で、土は赭土、松は赤松のすんなりしたのが多い。規模の大きい事がこゝの特長で、手入も中々によく行届き、眺は白山から日本海に到るまで自由自在である。松茸が又有名な產物で、舊藩時代以前から下々の者には取らさなかつたものだと云ふ。

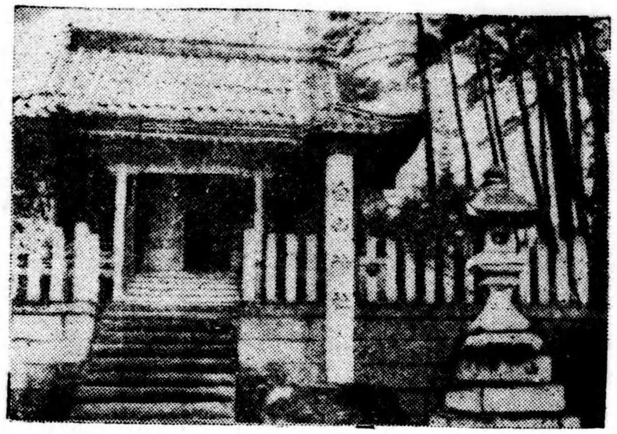
ゆの山や秋の夕はよそのこと（千代）

なつ山のしたゝりしきる出湯哉（能順）

椎木淵＝町から數町の西、大聖寺川の碧をたゝへた潭で、附近一帶鮎の名所である。この淵に臨んだ丘の上に大堰宮がある。三代實錄に「清和天皇貞觀十八年七月二十一日授加賀國山代之大堰神社從五位下」と見えた古社で一幹の喬松高くそびえた下に小やかな堂が殘つてゐる。このあたり風光もよく目下遊園地を作ると云ふ議があると云ふ。

法星陵＝前章參照

四、粟津温泉



粟津公園ノ一部

當所は能美郡粟津村の地にあつて、交通は動橋山代から温泉聯絡の電車でゞも達する事が出來るし、省線粟津驛から自動車七分、電車十二分で行くことも出來る。

この土地につくと、四圍田園を見つゞけた目に自と異つた風光が感ぜしめられる。木々の茂つた背後の山は、町屋の上におほひかぶさらうとして、青嵐が面をかすめて去る。町つゞきの間を越智坊川の流がさゝやかな音を立てゝ流れ、前面には向山帶仕山の一群が他と境をへだてゝゐる。これ等の山々には楓樹が多く紅葉狩に適してゐる。

温泉の由來を藥師寺記等の文書によつて案ずると、今より千二百餘年前、元正天皇の養老二年七月末に、越智の僧泰證大師が白山參籠の途次、夢に白山大權現の靈告を感じてこの温泉を知られたとしてある。創期の舊さに於ては北陸の他の温泉と爭ひ、那谷寺と同じ人の發見である。で大師の德を慕ふ村民等か相計つて其の地に浴槽を作り、大師自刻の藥師如來像を守護佛として、背後の山に祠つて、養老山藥王寺としたと言ふ事である。

寛和四年花山法皇が北陸巡錫の際にも、この湯に浴され、寺號を大王寺と下されたと言ふ。粟津はこうして宗教と結びついて發達した温泉で、今だに寂園氣や人々の感じに何か宗教的な、敬虔なものが殘つてゐるのである。

現今旅館も二十を以て數へ、人口三千、一年中を通じて浴客の絶えた事がなく、昔ながらの聲價を持續してゐるのである。そうして營業者も常に新設備に留意をしてゐる樣であるから、一流温泉の名聲も永く持續される事であらう。物價は低廉で、一泊三食附二圓五十錢から四五圓迄、土產物に九谷燒、漆器等の細工物がある。

〔温泉の效能〕

湯は微かに褐色じみた色かある硫黃泉で鹹味も殆んど感ぜられない位にある。硫化水素の臭が

強い。反應はアルカリ性。温度は攝氏四十七度比重攝氏十五度に於て一、〇〇三二

一立中(リットル)の固形分定量分析表左の如し。

一、固形分總量	二、二三七七瓦	一、硅酸	〇、〇一二一瓦
一、硫化水素	〇、〇一七三瓦	一、炭酸	〇、六五三四瓦
一、格魯兒	〇、三三五九瓦	一、無水硫酸	〇、四七二七瓦
一、酸化カリウム	〇、〇三五四瓦	一、酸化ナトリウム	〇、三八四〇瓦
一、酸化カルシウム	〇、四五九五瓦	一、酸化マグネシウム	〇、〇〇九八瓦

今是れを學理的に結合すると

一、硫化水素	〇、〇一七三瓦	一、遊離炭酸	〇、一四五七瓦
一、鹽化カリウム	〇、〇五四一瓦	一、鹽化ナトリウム	〇、三四七一瓦
一、硫酸カルシウム	〇、八〇三二瓦	一、重炭酸ナトリウム	〇、五九三七瓦
一、重炭酸カルシウム	〇、三七二五瓦	一、重炭酸マグネシウム	〇、〇三六〇瓦
一、硅酸	〇、〇一二一瓦	一、酸化鐵及礬土	痕跡

『脚氣山中瘡粟津胃腸に疝氣片山津。』と古い俚謠に殘されてゐる樣に、粟津温泉は皮膚病一切に

對する效能には定評がある。

其の他醫治效能左の如し。

慢性呼吸器病、初期肺結核、慢性消化器病、皮膚花柳病、僂麻質私、神經痛、神經衰弱、慢性腎炎、貧血、婦人生殖器病、

入浴數は一日三回以内、一回十五分以内、飲量は毎回一盞凡そ二〇瓦程、

(但し當溫泉の特色として、一區域内に約三種の異つた溫泉が湧出してゐる。總湯、藥師の湯、御坊の湯が元で、右は粟津十四番地湧出のものを擧げたのである。)

〔傳說と名所〕

藥王寺=温泉開發に緣故の深い當寺は背後の養老山の中腹にあつて、泰證大師自刻の藥師如來像と白山大權現の大地聖觀音像を祀つてある。寺内には、くはしい温泉緣起の卷物の保存されてあり、樹木の生ひ茂つた趣もよい。

養老公園=藥王寺背面一帶の阜陵を開發して公園にしたもので、頂上に泰證大師の銅像があり、眺望宏大、園中に越智坊瀧があつてこの水流れて街を貫流する越智坊川となつてゐるのである

その附近は松杉鬱蒼、幽邃の趣が深い。西方谷ケ市は杜鵑の名所である。

牧姫塚＝町を東北に出はずれて行く事三丁、田の中の一幹の老櫻の下に取り殘された三基の古墓がある。半ば以上土に埋められて、見るかげもなくなつてゐるが、土地の古老の記憶にあるこの塚は、附近數丁四方柵をめぐらして近づくものもなかつた程であつたと言ふ。是を牧姫塚と言ふ。以前は五層の花崗石塔であつたそうだが、今は最上の一座だけが現れてゐる。昔王子牧姫がこの地に配流されて死んだと言ふが、委しい傳說が知られたら、愁人の胸をいたましむるものがあるであらう。

蟬丸塚＝牧姫塚の近傍にあり、名の來りし所以を知らず。

十二ケ瀧＝この道を十五六丁も行くと日用村十二ケ瀧と言ふのがある。瀧はそう大きくないが上下十二段に分れ一絲も水が他に洩れず樹木巖石の勝がある。夏時は涼味一段なるものがある。

那谷寺＝前章參照

五、片山津溫泉

片山津溫泉は江沼郡作見村字片山津にあつて、大聖寺驛から約二里動橋驛から三十町、溫泉電車によれば汽車から七分で達せられる。乘合自動車は四分間一人四十錢である。

地形は前方柴山潟を越えて柴山一帶の砂丘があり後方直ちに藥師山になつて、丘陵が大聖寺にまで連つてゐる。右方の砂丘を越すと二十町で、海岸で動橋平野の彼方に白山々脈も美しく眺められる。春水の漲つた頃、若葉の地を蔽ふ時分の此處もよいが、夏の片山津は特別である。夜屋形船に灯を入れてゆるやかに水を渡つて行く時、蚊も居なければ、患もなく涼味も一段である。冬は鴨の獵場であつて曉方から舟を出す都人もあるが、炬燵に首までうづめて白皚々の湖面、白山の彼方を眺めてゐるのも一興である。

發見は承應年間大聖寺前田藩主前田利明が鷹狩の折、湖邊で水鳥の群てゐるのを見て家來をして探らせて湖上にこれを得たと言ふ事になつてゐる。が其後二百年、何等世に聞ゆる事なく湖底にたぎつて遊泳する魚族を驚かしてゐたのであつたが、文政の頃初めて湖中に槽を埋めて酌み取つて湖邊の假小屋で澡浴せしめたと云ふ口碑がある。其頃まだ大聖寺方面から海濱の村落に通ずる道が僅かに一筋山涯を通じてゐたのみで、餘程淋しい所であつた。溫泉としてこゝが世間に認められ出したのは明治になつてからの事である。明治三年金澤の人近藤某、潮津村の東出氏等が

片山津全景

工事を起して數度風浪に妨げられて九年に到つて初めて完全に湯槽を作る事が出來た。そうして少しづゝ背後の藥師山を崩しては湖邊に家を建て增し開けて行つたもので、近年の繁盛を見たのは埋立工事を了つた十年程以前からの事である。目下宿屋も十數軒人家百を以て數へるやうになり北陸六大温泉中押しも押されもせぬものとなつた。

年々の浴客十數萬、夏時の如きは常に滿員の狀態である。宿料は一般に安値だとの評で一泊三食附五圓から二圓五十錢まで、土産物には竹細工、九谷燒、湯の花、せんべい等がある。

〔温泉の效能〕

温泉は無色透明で微かに腐卵の臭がある。强い鹽分を含み反應はアルカリ性である。常温度攝氏三十二度乃至六十一度で入浴には浴槽にたゝへて冷まして用ひてゐる。

一立中(リットル)一六、八二〇〇瓦の固形分を含み分析表左の如し。

一、格魯兒加兒臭謨	八、四四一七瓦	一、ラジウム含有	
一、格魯兒那篤留謨	五、八七七二	一、格魯兒加留謨	二、〇〇七〇
一、重炭酸加里臭謨	〇、七三二〇	一、硫酸加留謨	〇、五八六七
一、硅酸	〇、一二七八	一、礬土及酸化鐵	〇、〇五七八
一、硼酸痕跡		一、遊離炭酸	〇、三二六〇
一、硫化水素	〇、〇一一五		

效能は昔から胃腸によいとされてゐて、遠くから來浴する人が多い。内用すべき量は一日一五〇〇瓦一回五百瓦程、但强鹽味故冷ましてはとても飲み惡い。

醫治效用

内用　慢性腸加答兒、慢性胃加答兒、慢性咽喉加答兒、糖尿病、黄疸、疸石等

浴用　慢性僂麻質斯、慢性皮膚病、關節の强直、神經痛、腺病、炎性滲出物、痔疾、女子生殖器病

（注意――鹽類泉には普通石鹼はきゝません又白粉はつけると黑くなります。）

〔名所と傳說〕

片山津温泉

柴山湖＝前面の湖は、日本海の砂丘の爲動橋川の河口が埋められて出來たもので、其割合には深く水も美しい。魚類は非常に多く附近の村落には數百の漁師が生活して居り、冬の日なぞ舳をならべて漕ぎ廻つてゐる樣は壯觀である。

藥師寺＝愛染院藥師寺と稱し背後の丘陵に在る。風景は勝れて居り秋は茸狩によい。

手塚山＝温泉に居て左方湖の上に見ゆる白い砂山がそれで、その麓に實盛首洗の池がある。

篠原＝篠原の里は古くから歌枕にされてゐた土地である。古今集俊成の歌に

世の中は浮ふししげき篠原や
旅にしあれば妹夢に見ゆ。

降つて壽永年代齋藤實盛の事蹟で有名である。蕪村の句に

名のれ〳〵雨篠原のほと、ぎす。

橋立海岸＝潮津村から小畑・鹽濱なんぞの村を越えて一里計行くと小鹽の海へ着く、手前の尼御前岬は巖石の海に飛出してゐる所で岩の裂目に打ちこむ浪も面白く、橋立の岬と對して小鹽浦の入江を作り、遠淺で底も砂地で絶好の海水浴場である。

六、和倉温泉

能登半島の灣内に位置するこの温泉所はその名を夙に關東方面に知られてゐて百里を遠しとせずに出掛ける旅客を以て夏期繁盛を極めてゐる。

北陸線津幡驛又は金澤驛で七尾線に乘替へて砂丘の間を行くこと約一時間七尾港に着する、こゝで下車して自動車に乘るか和倉通ひの蒸汽船に乘ずると二三十分間で達し得るのであつて、地形背後に丘陵を負ひ、前は七尾灣を越えて、能登島に對してゐる。灣内浪も靜で風光に於ては何所の境にも遜色のない事を斷言する。あの浪の荒い日本海岸中こんなおだやかな所があると云ふことは思ひ出したゞけでも愉快ではないか。

この地の由來は舊く平城天皇大同年間から開けてゐたと云ふことであるがその誇るべきところは過去の歴史ではない、今日の聲名と繁榮とであらう。地稍北に遍して浮薄な時流にも染まず益々健全に發展してゆくであらう當温泉は、反つてめぐまれた位置にあると云はなければならぬ。

目下内湯ある旅館のみでも、二十軒に及ばんとして、設備亦他に誇るべきものがある。食料豊富新鮮、宿泊料も割合に低廉である。土産物としては湯の花等。

（温泉と效能）

強度の食鹽泉でヨードブロームと及鹽化土類を含有してゐる、色は清澄比重一、〇一六、定量分析左の如し。

クロールナトリウム	一一、四一二四
クロールカリウム	〇、一四八一
クロールカルチウム	八、七六八五
ヨードナトリウム	〇、〇〇二五
ブロームナトリウム	〇、〇一四三
硫酸カルチウム	〇、二四二五
硫酸マグネシウム	〇、〇二三三
硫酸亞酸化鐵	〇、〇〇一九

和倉温泉

クロールアムモニウム	〇、〇〇六二
硅酸	〇、一〇四一

一慢性消化器病並傷害に對して特效のあることは今更述べる要もないことであるが其他の醫治能用は浴用として、

慢性僂麻質斯、麻痺病、慢性生殖器及泌尿器病、貧血、腺病質、諸病恢復期濕疹

内用としては同量又は倍量の水に稀釋して用ゐて、

慢性消化器病、慢性喉頭及氣管支加答兒、貧血腺病

（但神經興奮の方逆上の氣味ある方は入浴見合はさるべし）

（附所名所）

御便殿＝今上天皇の東宮に在せられた時御巡遊の途時立寄られた場所で西方の山頂にあり直に海に臨み見晴しのよい場所である、食後の散策に適してゐる。

海水浴場＝御便殿の丘の下にあつて波も靜で遠淺であり女子供の遊泳にもよい。

辨天島＝遊園地として開かれた所で山頂に一大運動場があり競馬等のもよほしがある。

机島＝當温泉を去る一海里程の海中にある島で遊園地として開かれ果樹繁茂し夏時の納涼には最

和倉温泉

もよい所である。灣内には發動機船ボート等數十艘あつて何時でも遊覽の求に應ずるのである。

其他＝少名彦名神社は文德天皇の御宇天安元年にこの所に奉祀された祠で鬱蒼たる老樹の下にあり、浚雲山信行寺は眞宗大谷派の寺院である。又白巖山青林寺は曹洞宗に屬し新西國三十三番の觀世音が安置されてゐる。

營業御案内

□山中溫泉　一——九
□山代溫泉　一〇—二六
□粟津溫泉　二七—二八
□片山津溫泉　二九—三七
□溫電其他　三八—四五

山中温泉

イロハ順

大島屋	電話七番	
近江屋	電話二二番	
かきや	電話六番	
かめ	電話拾番	
桂屋	電話一六番	
よしの屋	電話一四一 一二〇番	
よし本屋	電話一四番	
俵屋	電話三八番	
魚屋	電話五五番	
とや屋	電話一一番	

泉旅館

イロハ順

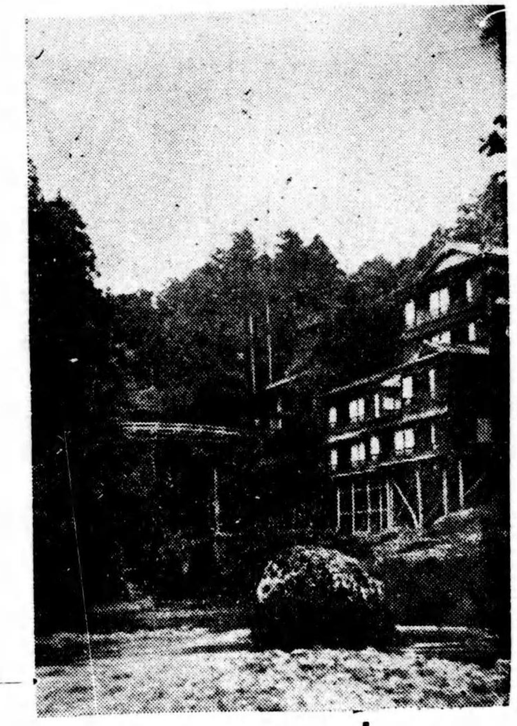
山田屋	電話三二番	
五明館	電話二番	
こんや	電話三一番	
こまもの屋	電話三五番	
越後屋	電話三九番	
あたらし屋	電話五番	
笹重	電話三六番	
起久屋	電話四七番	
三谷屋	電話三番	
下口屋	電話九番	

山中溫泉蟋蟀橋畔

好評ある名物御料理

增喜樓

電話參拾四番



風光明媚なる蟋蟀橋の絶勝に御來遊賜らば世塵一洗して自ら仙境に遊ぶの感有之候

山中溫泉の眞價を味はんとする人は蟋蟀橋下より發船する黑谷下りの快遊船に乘らざるべからず該船は畏くも朝香宮殿下始め北白川宮殿下の御乘船の光榮を辱ふしたるにても證明せらる

春は新綠夏の清涼秋の紅葉は云ふ迄もなく冬の雪景沿岸の奇勝名蹟は船員の快辯を以て紹介せらる

黑谷河畔には

美妓！　良酒！　佳肴！

を以て待つ

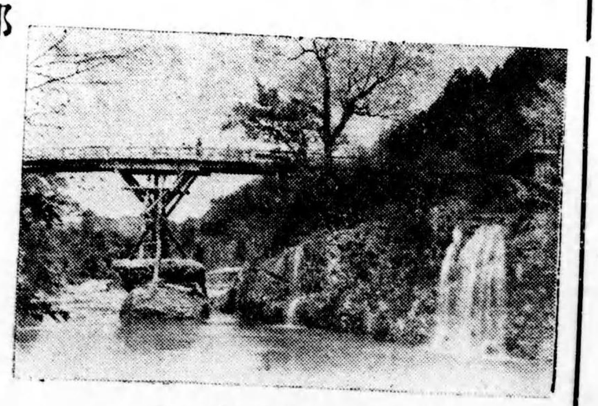
旭樓事環翠樓や歷史的に緣ある遊園地あり

御料理井遊船部

環翠樓

村井正吉

電話五十九番



黑谷橋之景

抑も我山中漆器は其起源深遠にして今を去る千三百年以前難尊親王山中に御來臨の砌り此地漆器材料の豐富なるを賞され止りて村民等に其傳授相成り年久しく盛大なりしが中古に到り一時中絕したるを時の藩主前田卿之を憂ひ給ひ綿屋三平氏に再興を命ぜられ更に漆器研究所を起すに到り三平氏自ら所長となり鋭意奮鬪遂に今日の隆盛を見るに到りし所なり輓近に至り內地は勿論海外に輸出の數頓に夥しく弊店は益々時勢の嗜好と新考案に焦慮しつゝありて優良品のみを精造し廉價に且つ懇切に特に高需に應ぜんとす本溫泉場に探勝入浴の諸士よ土產物として將に入浴記念として聲價の高き山中漆器を需められんことを

家統

岩橋商店は綿谷三平氏の分家なりしが明治維新の際名字御免と同時に岩橋と名乘りしものなり

漆器元祖

井玩具販賣

山中溫泉

わたや事

岩橋商店

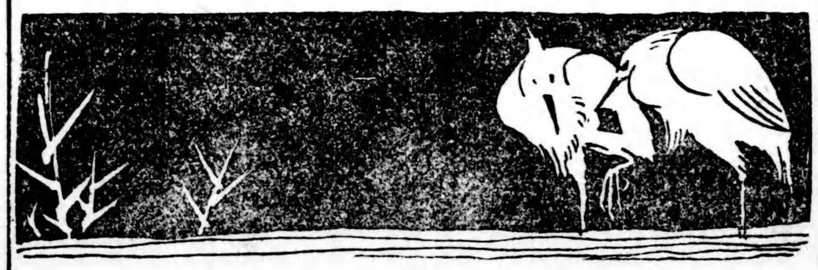
代表的御土産菓子は

各皇族殿下賜御愛用之光榮

○鑛泉銘菓　越の雪
○湯の花製　翁　羹
○名物　粟まんじゅ

前記無上の光榮を荷ふ
本舗製菓部獨特の　精製品に限る

營業品目
諸新聞・書籍・雜誌類
文房具・雜貨・運動具
菓子・煙草・名所繪ハガキ
湯の花發賣本舗



石川縣江沼郡山中溫泉所
村瀨玉壽堂
振替金澤一六七三番
電話二十四番

漆器　商山

賜宮內省御買上

石川縣山中溫泉

山岡漆器店

長電話壹五番

創業明和元年

商山漆器研究所

忝
朝香宮殿下御成
賀陽宮殿下御成
故北白川宮殿下御成
有栖川宮妃殿下御成

御下賜金及ビ御
用品ノ榮ニ浴ス

加州山中溫泉
九谷燒窯主清
三軒天口永壽

長電話三三番

同東町
永壽支店
電話一〇五番

内湯
加賀山代温泉
たや旅館
電話七貳番

山代温泉
大のや
電話長五六五番

■本館改築落成大廣間を設く
■浴場も新築落成貸切湯の設備有
■客室清酒にして室内電話の便有

内湯旅館
山代温泉
吉野屋
電話長參番

本回遊客
の行方は
鶴水館
在存の

春日山上一大庭園
眺望佳絶閑静
加賀山代

とらや旅館

長電話四番

福島大將

山下家旅館庭園に於けるる

山代温泉

山下家

電話壹壹番

内湯旅館

加賀山代温泉

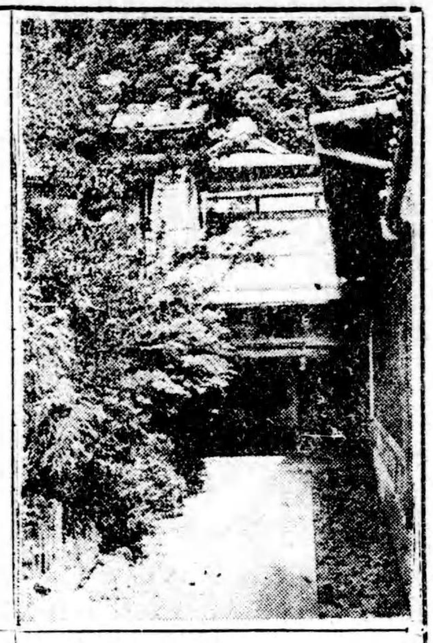
館内家族湯ノ設備アリマス

内湯 富士屋旅館

山代へ御越し下
されし御方様は
先づ森下政男と
語られたし

森下政男

長電話貳拾四番



山代温泉

あらや

電話長七五九番

山代檢番株式會社

電話五三番

山代檢番 演藝部 春日座

電話六四番

所屬藝妓

（イロハ順）

今江家
政弥
柳香
越廣

金津家
玉千代
一二三

吉田家
金弥
小紋
吉牛

谷の家
すゞめ
小榮雪
千若龍

中村家
小桃太郎
若子
〃小奴
を梅
小やち
もち
奴

中杉家
三一松勝
筋勇子見

木下家
豆千代

都石家
千代秀
初歌團
枝勇子

元祖

煉羊羹

創業文政二年

常に番茶御用に
應じ永昌
號を賜ふ

山代温泉
菓子屋號
琫永昌堂
電話四二番
振替口座三七六〇三

山代温泉検番株式會社

電話五八番

所屬藝妓（イロハ順）

今市家 小市助花
井村家 嘉代吉
桶谷家 玉重時〃 太雄葉助
谷本家 奴照歌 祝葉子香松平
村井家 種靜久勘
出口家 小金

旭家 五金音カクラルブタ羽吾月
佐藤家 小ま千竹ねき奴三鳥
北村家 一吾笑 榮妻香子
桔梗家 壽光子子次染
菊お歌丸

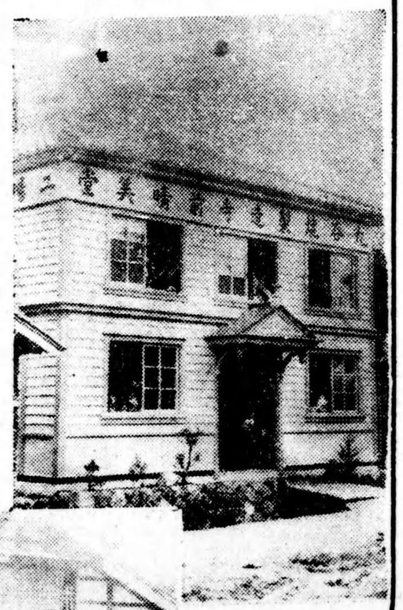
元祖鑛泉煉羊羹

和洋製菓
陸軍酒保
御用達
精妙

山代温泉所
電話四拾參番
深川堂

九谷陶器來歷

慶安中大聖寺藩祖前田利治郷本郡大日山麓九谷村に磁土を發見し後藤才次郎田村某をして磁器を製造せしむ才次郎肥前唐津に赴き在留七年遂に奥祕を得歸來九谷に窯を築き久隅守景に畫を描かしむ後世の古九谷是也、中頃業衰へしが文化の始大聖寺の吉田屋傳右衛門窯を山代に興し興復を計る吉田屋窯之なり、天保中飯田屋某金彩赤絵を初め之に類するものを總て九谷と稱するに到れり、今日の山代九谷はその正統を繼ぎ金圖手鬼の手等他の追隨を許さゞる精品を出す大方に勸むる所謂なり。



晴美堂工場
山代九谷窯元
寺前晴美堂

山代町(郵便局隣)
九谷燒窯元　晴見堂　寺前商店
電話　十五番
振替大阪二九八四二番
金澤一九九八番

製陶場ノ一部

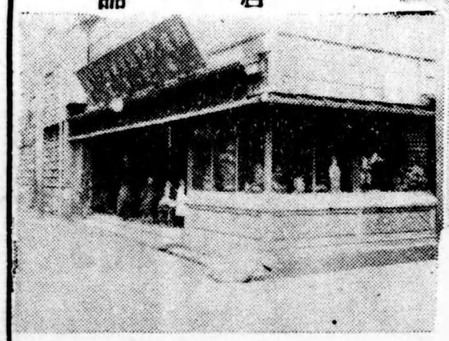
畫工場ノ一部

九谷焼竈元

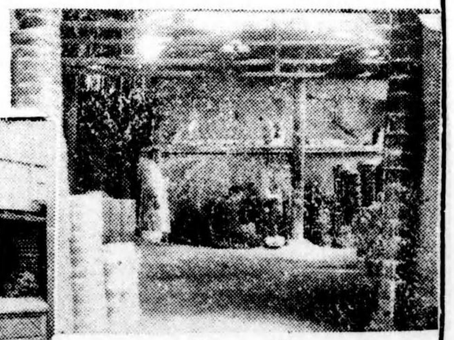
山代溫泉場

島田陶昌堂

電話四四番・振替大阪四〇一一〇番
金澤三六七二



舗店



本窯場

既成宗教や舊道德に慊らず、科學や哲學に安心を得ず、低級な淫祠邪教にも走れず、徒らに一身一家の方向に迷ひつゝある人！

現代道に飽き而かも信仰の道にも入る能はず、たゞ保守安靜養生や滋養萬能を事として、日々己が病弱を嘶ちつゝある人！

活修養
活養生　修養雜誌　活人　毎月一回二十日發行　を讀め!!
活處生

一ヶ年分三圓三十錢、半ヶ年分一圓七十錢、一部三十錢

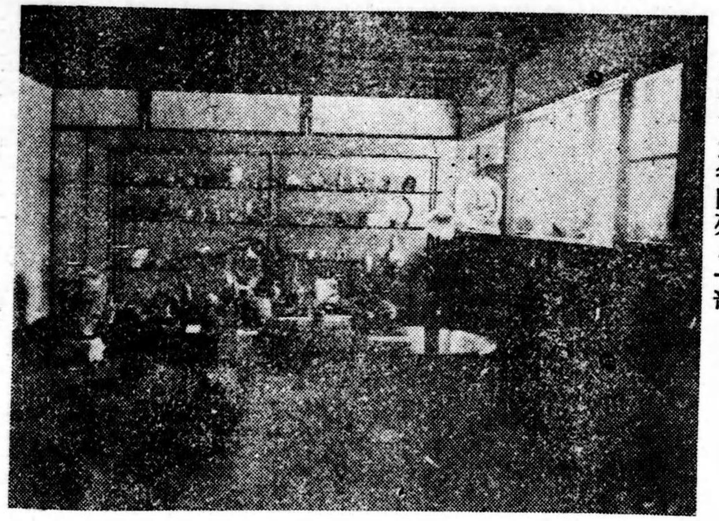
本誌は「人」としての全體に生くべき修養、衞生、經濟の三者融合せる常道を宣唱せんがため、凡の體驗や事實を基礎とした活文字を滿載せる現代的修養雜誌である。

本誌を讀んで多年の慢性病が根治した實例が多々あることは確かに本誌の誇りとする處である。

發行所　大阪市東區唐物町一丁目五番地
活人社
電話船場一八六一番
振替大阪四六七三番

北陸取次店

石川縣山中溫泉場　村瀨商店
同縣山代溫泉場　下出書店
同縣粟津溫泉場　桂木商會
同縣片山津溫泉場　森三商店
同縣和倉溫泉場　辻商店
同縣金澤市廣坂通　內田書店
福井縣芦原溫泉場　益井新聞舗



歴代古九谷陳列ノ一部

抑九谷陶器の起原を案するに寛永中舊加賀大聖寺藩祖前田利治卿會ま封内江沼郡大日山の麓なる九谷村に良磁石あるを耳き藩臣田村權左衞門、後藤才次郎をして窯を其地に築き磁器を製せしむ而て苦蔬十の九に居る世嗣利明卿深く之を憾み才次郎を肥前有田に遣はし製陶の業を習はしむ居ること數年にして藩に歸り更に窯を九谷に築き畵伯久隅守景を聘して陶畵を描かしむ瀟洒にして雅趣あり之を九谷燒の濫觴とす後世に至り古九谷と稱して珍賛するものは實に當時の製に係れり文化の初め大聖寺の商賈吉田屋傳右衞門九谷陶器の衰廢せるを慨き以謂らく僻陬の地未た其産を阜にするに足らすと乃ち窯を我山代村に移して盛に製陶す後世之を吉田屋窯と稱す天保中畵工飯田屋八郎右衞門赤彩に據りて一種の新案を發明し古代の紋樣を描き施すに金彩を以てせしかは燦然人目を射る所謂八郎畵是れなり之た中興赤繪と爲す爾來他の地方に於ても此風を摸擬し總べて九谷燒と稱ふ慶應中陶工永樂善五郎を京師より聘し事に製陶に從はしむ金蘭手昂千赤繪等の精品擧な此時に製せり明治十二年九谷陶器會社の始めて陶工場を彼吉田屋窯の址に設く予亦之に與かり事に製陶に從ひ大に改良を圖り其後同工場を引受け舊來固有の畵風に吳洲を加へ古染附祥瑞等を摸し其風高韶ありて雅趣に富めるを以て九谷燒の聲價大に揚り其盛行すること二百有餘年來未た曾て見ざる所にして内外の博覽會及び共進會等毎に優等の賞牌を賜り從ひて精良の九谷燒を需むるもの必らす我江沼郡に於てするに至れり蓋し江沼郡は九谷陶器の産源地たれはなり予素と古九谷の流風餘韻を慕ひ製造するは卽ち必す古九谷の特粹を失墜せざることを期し且つ幾多の新好案に依り以て當世の嗜好に適はんことを欲し心を改良に潛め力を精製に致し些の遺憾なからんことを惟へり江湖の諸士幸に予の志を諒し賞美を吝ますして日に愛顧を增す感謝曷そ己まん願ふに今や粗製漸く行はれ特粹亦稍失はる予不敏なりと雖力めて此弊を僻け愈益奮勵して諸士の知に酬ゐんことを期す諸士願くは舊に倍して垂愛し賜はんことを

九谷燒窯元菁華

九谷燒窯元

陶々軒 須田菁華

加洲山代温泉

振替大阪一三九三二番
電話 八 番

粟津温泉

（イロ）

橋本旅館	話電 2
法師善吾楼	話電 1
かみや旅館	話電 17
かめや旅館	話電 23
能村小松館	話電 3

鑛泉旅館

（ハ順）

のとや旅館	話電 7
山下屋對岳館	話電 4
山本屋旅館	話電 12
坂田屋神泉館	話電 8
森本對山館	話電 20

湖面に臨みて風光明媚
各室新築にして設備亦
完全す

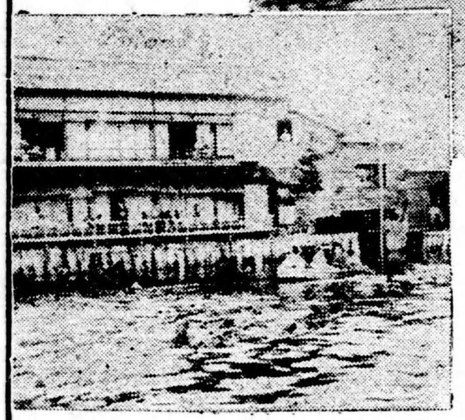
□□□

片山津溫泉

東野旅館

電話長七番

あらや旅館客間



柴山湖より見たる同旅館之景

客舍は高く湖上に臨み座して潮音を聞くべく俯して釣魚すべし。前景又湖を隔てゝ白山に對す眞に仙境たり。

片山津溫泉

湯内あらや旅館

長電話十五番

內湯旅館

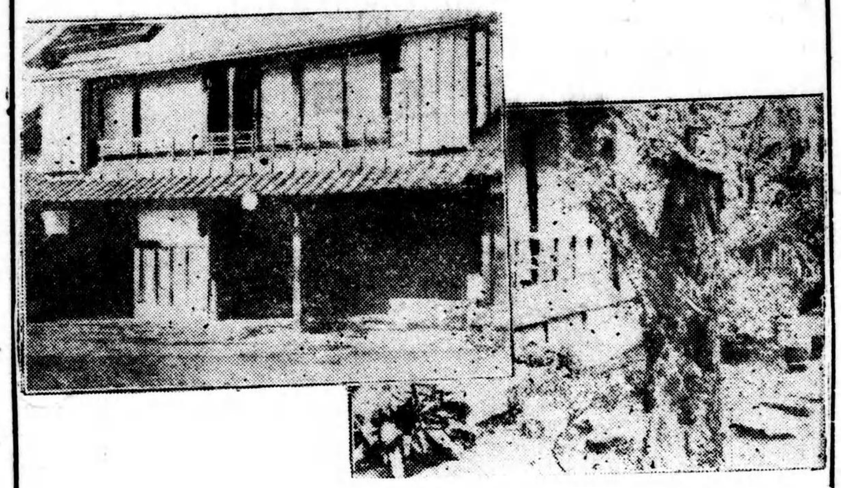
湯の出

（電話一番）

館主　湯の出仁平

當館は出湯者なるが故に湯の出の姓あり。

親切丁寧をむねとします



親切第一

別莊の風光

特に佳絶也

片山津温泉

內湯　鹿野屋

電話十一番

別莊

電話二十一番

片山津溫泉
內湯旅館

森本旅館

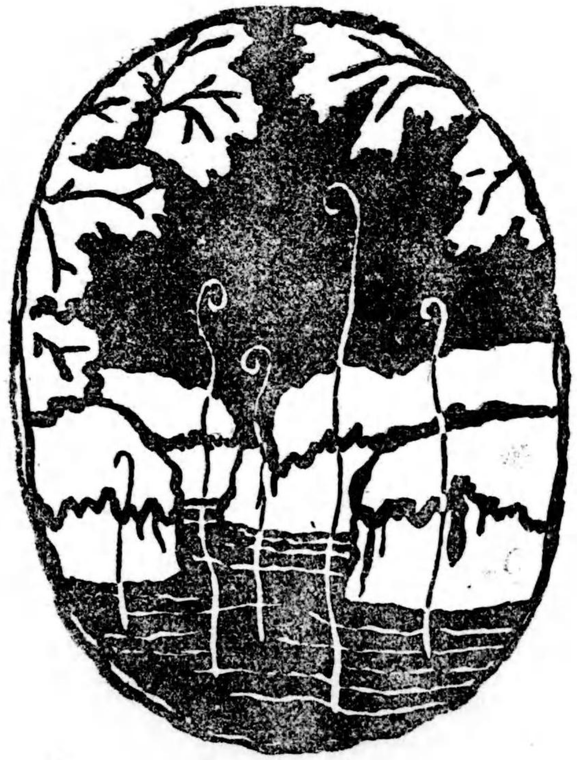
電話長二番

第一別莊
第二別莊

風光の佳麗と設備の完全とは他の追隨を許さゞるものと深く自信仕居候

內湯

矢田屋旅館



片山津溫泉

長電話八番

□柴山湖畔に臨み四季の風光絶佳

□勉強をむねとしてすべてお客本位

□上方風の待遇にて鋭意改善を志す

片山津温泉場

關旅館

長電話十番

□動橋——片山津間
乘合一人 四十錢

□片山津——橋立間
乘合一人七十五錢

（所々貸切の便あり）

片山津自働車株式會社

電話十六番

營業種目

○雜貨 ○煙草賣藥 ○湯の花

○化粧品 ○貸本

湖山亭玉突場

志羽商店

電話五番

振替金澤九一四

□新勉 □裝強 □美第 □麗一

片山津温泉

内湯

ふじや旅館

電話二〇番

みやげ堂 出途商店

（出途商店主）

□ 塗器 玩具 湯の花 菓子 井雜貨

右ホテル全景
左ホテル正面

片山津溫泉
ホテル
角惣支店
主館 淺田由太郎
電話長二三番

◆ 書籍・雜誌
洋酒・食料品
和洋・雜貨 ◆

石川縣山代町
下出義成商店

恐れ多くも明治四十二年九月東宮殿下（今上陛下）北陸行啓の際及び大正四年十一月御嘉納大典奉祝の爲此菊酒を献上し滋養に富む酒は祖先榮光を以て家に傳り來れる製造秘訣を以て其來由を述べ此の盛宴に上り古今聊か御間に合せんとする所なり

我が越路唯一の名酒なり御影前へ捧げ奉り深く賞讃を蒙り送れり

留中菊の宴に初めて蓮の上に數年當地在住の人々因て大師の御忌日に捧げ供へ奉る

老幼男女を問はず胃腸の病體に効能を助け血液の循環を欣び

嬉しき一種の名酒は腹量に應じ適度に飲めば宜しく其口腹に欣び

製造元 越前吉崎（見谷屋）
和田智三郎
敬白

山中温泉御入浴
那谷寺御來詣
みやげには
ゼヒ

寛永年間より歴史を有せる
もみじ焼商標御注意御購求を
意匠登録
紅葉煎餅
加賀那谷寺通
本舗 石川屋紅葉堂

山中温泉
名物 山中湯の花おこし
湯の花せんべい
加賀山中温泉所
石川屋紅葉堂

加賀那谷村
石川屋紅葉堂
製菓部

貴需ニ應ズ

□英・佛・獨文飜譯ノ依賴
□新聞雜誌ノ編輯
□案内書・地圖・繪ハガキ
其他印刷物ノ作製
（御照會ヲ乞フ）

東京市小石川區白山御殿町百〇九
至上社

近代文明社刊行書

ホフマン著　牛山充譯（六版）
ピアノの彈き方

世界四大ピアニストの一人なるホフマン氏の原著を造詣深き牛山氏が平明に譯したものピアノの手引で此書以上のものは絶對にない。
（定價二圓三十錢　送料十七錢）

レーマン著　牛山充譯（三版）
獨唱の仕方

聲樂界の女將軍レーマン夫人が今日の地位をかち得たるまでの一種の自傳的聲樂法で聲樂志望者の好伴侶である。
（定價二圓六十錢　送料十七錢）

原田實著（再版）
國際日本の教育

今日では國際的全人類的の教育が必要だといふことを各方面から明かにしたもので、其他著者獨得の情味ある教育論が澤山入つて居る
（定價一圓九十錢　送料十五錢）

山田わか著（再版）
家庭の社會的意義

現今隨一の婦人論客たる山田女史があらゆる方面から婦人の立場を論じたもので、家庭の人乃至家庭の人たらんとする婦人にとつて金玉の文字である。
（定價二圓八十錢　送料十八錢）

フィールディング著　瀨戸義直譯（再版）
性の社會的考察

性の問題をこれ程眞面目にこれ程平明に取扱つたものはない。最近我國でも婦人凌辱事件など頻發の際好箇の參考書である。
（定價二圓三十錢　送料十五錢）

近代文明社刊行書

フイリツプ作　堀口大學譯（再版）
シヤルル・ルイ
フイリップ短篇集

フランスの乞食の息子の短篇集である。新興プロ文學に如何に美しい芳醇があるかを知らんとならばこれを讀め。
（定價一圓五十錢　送料十五錢）

田山花袋著（五版）
近代の小說

遠く明治文學の初期から今日に至るまでの著者の文壇的生活を回想的に書いたもので、上品な而も肩のこらない面白い讀物である。
（定價二圓四十錢　送料十七錢）

水谷まさる著（五版）
抒情詩集
靑みゆく月

かの大空高く彌々靑みゆく月のそれにも比すべき純一なる詩境に立つて歌へる抒情小曲集。好評重版。
（定價一圓五十錢　送料十五錢）

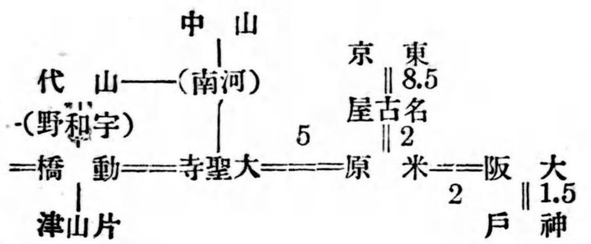
水谷まさる著（再版）
童謠集
神さまのお手

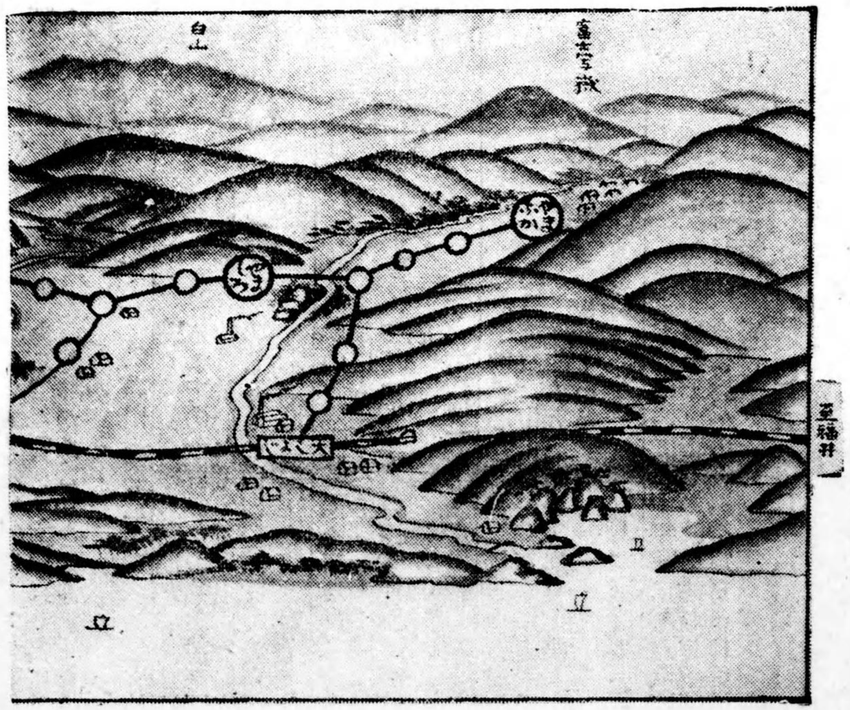
子供に心から喜ばれる水谷氏の童謠集。中山晋平、宮原禎次兩氏の作曲も五篇ついて居り、美しい挿畫もある。
（定價一圓三十錢　送料十三錢）

山宮允編（再版）
日本近代
詩書綜覽

本書は過去四十年間に於る我國詩書史で、古き傳統を溫ねて、新しき世界への進路を定むるに好適の書。
（定價三十五錢　送料二錢）

（線路圖）

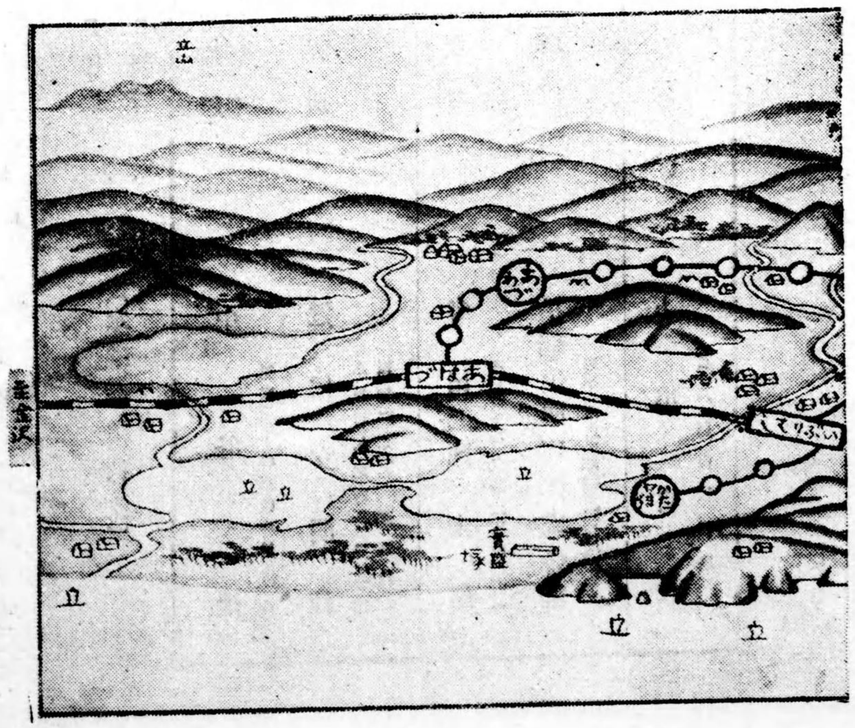




一等粟
一等粟
津津
上野
9直江
4金津澤
（數字ハ時間ヲ表ス
金陽米原外ハ急行）

◇
◇
◇

温泉電軌株式會社



大正十二年七月二十日印刷
大正十二年七月廿五日發行

〔定價金四拾錢〕

著作兼發行者　中谷治　東京市下谷區數寄屋町八
發行所　近代文明社　東京市九之內仲通三號　振替東京五八五八六番
印刷者　寺田國太郎　東京市牛込區早稻田鶴巻町三六二
印刷所　早稻田印刷株式會社　東京市牛込區早稻田鶴巻町三六二
發賣所　下出書店　石川縣山代溫泉塲

290
462

終